明治三十年十二月二十日發兌

女鑑

第百四拾七號

東京國光社

女鑑第百四拾七號

目録

小夜女　菊女



來年は來年はさて暮れにけり

花とうつり、月とうつりきて、はかなく一年も、殘りなく暮れはてむとする時に至りて、はじめて、いたづらに爲す事もなく過ぐしたることを知り、來年こそはと、さすがに思ひ立つとはすれど、さて、思ひたるばかりにて、いつしか、また、その年も空しく過ぐし、來年こそは必ずと思ひ立つも、やがて、また、かひなき一年をくりかへして、斯くて、幾歳の暮に、おなじかひなき思ひと後悔とを、幾度か重ねゆく事は、よく世の人のわづらふ病にて、いとくちをしきならひなり。くちをしきのみにはあらず、いと怖るべき人の病なるべし。斯くて、つひに爲す事も無く、また、やうやくに爲さむとするも、既に爲すべき時をあやまり、最早爲すべき時なくして、つひに爲したる事もなく、世に何の用もなき不具者と成りはつればなり。

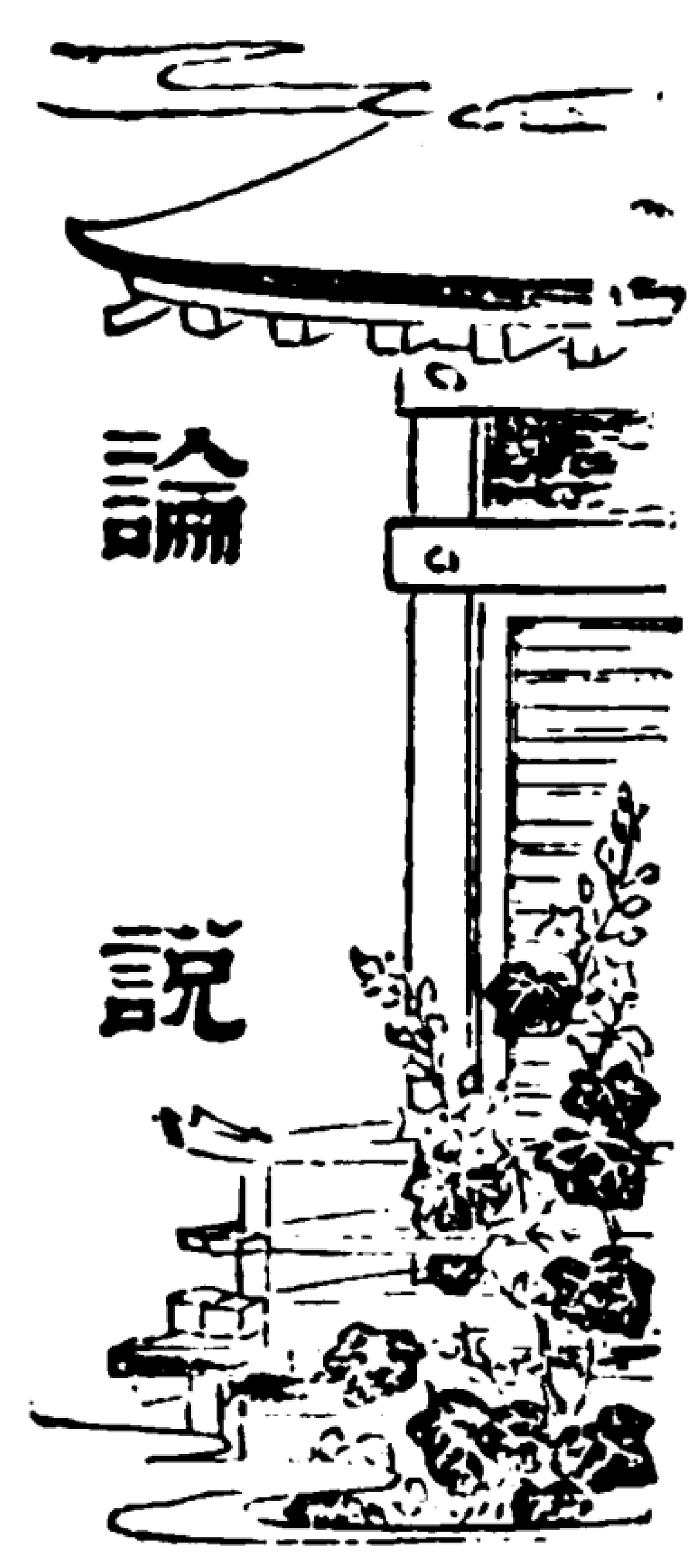
人は、すべて、志したる事、爲すべき業は、はやくこれを爲すことをつとめ、常にこれを爲すことを心懸けざるべからず。たゞこれを爲さむと思ふのみにては、いかで爲すことを得べき。また、明日よりなどと思ひてあらば、明日は、また其の明日と成り易く、つひに爲すべき時はなくてやむべし。されば、何事にもあれ、何業にもあれ、おのれが爲すべき事は、はやく直ちにこれに取りかゝり、また、常にこれを心にかけて爲さざるべからず。なほざりに思ふばかりにては、いつとてかこれを爲すべき時は無く、常にこれを心にかくるにあらでは、よく誠にこれを爲し遂ぐるを得ざるなり。志せる事、爲すべき業は、すべて、早く、且、常につとめざるべからず、然らざれば、來年は來年はとて暮れにけりのもの笑ひは、まぬかれざるべし。もの笑ひをまぬかれざるのみならず、終に世に用なき不具者と成りはつべきなり。恐るべきにあらずや。

殊に妙齢の女子に就きていはむに、もとより爲すべき事は、さま〴〵なるべけれど、すべて必ず爲すべき事は、やさしく美しかるべき日本女子の德のもとを修む

る業と、また、良妻と成りて、よく賢く一家を治め、賢母と成りて、よくやさしく正しく兒女を養育すべき日本女子の道のもとを、かねて尋ね知るべき心がけとなり。此の二事こそ、妙齡の女子が必ず心がけて爲すべき業なれ。實に此の二事は、眞の日本女子たるべき者が、未婚の妙齡時代に、是非に、かねて早く志し、常に心がけて修むべき所なり。未婚の妙齡時代こそ、誠に、女子が、女子の德、女子の才能を養ふべき時なればなり。

さるに、此の妙齡の時代に、はやく、此の女子の德と才能とを具へむ道を心がけ、常にこれを勉め修むる事をせずして、父母の温かなる膝下に、身を我儘にのみ振舞ひてあらむには、妙齡の時代は、やがてうつりゆき、修學の時代は、いたづらに過ぎ去れば、つひに女子の德女子の道を、よく充分に修め得べき時を失ふべし。既に嫁ぎて、はじめて、一家を治むる道をたづね、既に兒女の母と成りて、はじめて、兒女を養育するの道を學ばむとするが如きもの笑ひを招ぐべし。もの笑ひとなるとも、さてよく完全に其の道を遂ぐるを得んには、なか〱にめでたき事にはある

べけれど、一家の婦となり母となりては、種々の事情も用務もありて、最早、さる修學に專心する能はず、いかでか完全なるを得べき。しかも、さばかりの樣にては、よく完全に一家を治め兒女を養育する事は、いとおぼつかなき事の限なり。女子の德、女子の道を知るは、もとより妙齡の時代のみにてやむといふにはあらず。されど、妙齡の時代は、其の素養の時代にて、いと大切なる時にて、是非に修學すべき時なりといふなり。あはれ、妙齡の女子たちよ、優美なる女子たる智德才能をかねて、早く、且、常によく心がけて修め勵みて、來年は來年はとて暮れにけりの嘆息も、もの笑ひもなからむことを、希望するになむ。今年もまた既に暮れなむとして、殘る日數もあらず。思ひ出でて、今年の筆をさめに、つげまゐらすになむ。



論說

高等女學校の學科に東洋史を編入する必要

大林弘一郎

女子に中等敎育を施すべき必要は、世人既に之を認たり。故に、高等女學校の設立は、年々その數を增加し、各縣必、一個の高等女學校の設あるを見る日も、亦甚、遠からざるを知るべし。當局者は、宜しく、此の氣運に乘じて、以て完全なる女子敎育の普及發達を計るべきなり。

吾人は、此の際に於いて、大に現行の學科目に修正を加へ、以て、將來敎育上に良結果を收得せんことを希望するものなり。因りて、左に從來の失點を列擧して、敎育者、及當局者の注意を庶幾す。

一、倫理

二、國語漢文

三、歷史地理
四、家政

此の外、尚、言ふべきものなきに非ざれども、其の小なるものなれど、之を畧すべし。

さて、第一に、倫理に就いては、人道實踐の方法を　勅語に遵據して敎授することなれども、敎科書の一定せざると、擔當敎師の學風如何によりて、決して一定不變の準則を示し、實踐躬行の美果を得るに至らしめ難きことと、又は、未、倫理の何物たるを知らざる生徒に、輕率に、倫理を說き聽かせ、却りて、實行に疎なる傾向を生じたることなど、往々、之あるを見るなり。これ、豈改善を計るべき點にあらずや。元來、未、完全なる腦力を備へざる生徒に向ひて、徒に高尙なる學理を注入せんとするは、決してその効なきのみならず、大にその思想を攪亂せしむる害あり。故に、寧、卑近に失するとも、恰、禮式の敎授をなすに、その規則を嚴守せしむるが如く、一々、實行上に應用して、之を體驗することを務めしめ、以て忠信孝悌の實を知了せしめ、且、能く世間の情態の變化あることをも敎へ、之に對する注意の要綱を示さゝるべからす、決して疊の上の水練の如くならしむべからざるなり。たゞ、女子の性質は、規則的に物事を記取するに適するが故に、最、敎授に都合宜しきことなれど、理論は一切之を避け

て、恰、禮記の內則などの如く、何の時はかくすべし。何の心得はかくすべし。と、嚴重に訓戒的に敎ふべきなり。この敎育によりて、行既に修まるに至らば、學校を出でたる後、高尚なる理論を研究せんこと、又、意の如くなるべし。

次には、國語、漢文の中、國語のみを必修科となし、漢文を隨意科とせられたれども、元來、漢文と國文とは、既に、離れ難き關係あるものとなれる故に、今日にては、大抵、恰、必修科同樣に、何處の女學校にも、漢文を授け居れり。されど、之を隨意科として別になしおく必要は、實際上に於いて、見出しがたし。故に、吾人は、從來、之を必修科として、中學校の如くせんとの希望を有せるなり。殊に、文字を知り、高潔なる思想を養成し、道義を重うするに必要なる材料は、漢文に於いて、最多を見るものなれど、漢文を作る必要はなくとも、普通の漢文の書物を讀み得らるゝまで、敎育し置く必要は、慥に認めらるゝなり。故に、之を必修科に入るべし。たゞ、その敎科書は、適當なるものを編せざるべからず。

次には、歷史、地理の科なり。この科の必要なることは、世人既に之を知れり。然れども、吾人、現今の課程に於いて、滿足すること能はざるものは、他にあらず。元來、女子の性質として、甚、地理、歷史に就いての概念に乏しきは、事實の證明する所た

り。故に、東洋といひ、西洋といふ簡單なる事に就いても、地理上の東洋、西洋の區分を諳ずるに難く、又朝鮮、支那などの隣國の地理に至りても、至りて疎遠なる感念を以て之を見るが故に、更にその要を知ることなし。これ、もと、教授の如何にもよるべけれども、蓋、東洋隣國の地理歴史を、特別に詳細に教授する餘地なきが故なれど、畢竟科程の不完全なるによるなり。されど、地理科に於いても、日本、萬國の外に、特に東洋諸國の地理關係を授けんこと、將來の國民を養成するに於いて、最急務とすべき所なり。又、歴史科に於いては、日本萬國の外に、東洋史を授けて、重に、支那、朝鮮西比利亞地方など、直接の關係ありし諸國の古今沿革を知らしめんこと最急務とすべし。中學校の課目に於いて、既に之を必要とし、ひとり高等女學校に於いて之を缺くは、甚怪しむべきことならずや。且、是非とも、女子には、我が隣邦の關係を知らしめざれど、徒に、西洋の歴史地理のみを知るとも、其の効甚少し。又、東洋史を授けざれど、國語漢文の科に於いても、大に關係あるべし。故に、大は國家の趨勢に關し、小は、文學美術工藝の末に至るまで關係あるこの一科なれど、吾人は、切にこの一部を歴史科に編入せられんことを望むなり。

かく、地理、歴史、ともに、東洋といふ感念を養ふことを得べからしむる設備をなし、

而して女子を責むるに、東洋中の日本、即我が國家の歴史、及地位、若くは、責務等を知了せんことを以てし、その感念を養成して、之を兒童の教育に、將、家庭の教育に致さしめて、將來の國民、大に頼母しきものあらんことを必せり。

次に、家政の科については、大に實地實際を離れて、應用を顧みざる傾あり。これも、決して泰西の方法のみに偏すべからず、寧、國風のみに偏する方またされりとすべし。而して教授の目的方法、すべて、實地を忘れざること第一の急務なり。これも、亦教育者の一省を煩さゞるべからざるなり。

以上論列せし所は、吾人が、今日に於いて、之が修正、改良を加へんことを希望する所にして、この機を失へて、また、幾年の間を空過するに至らんことを恐る、故に、敢て、主に、東洋史を編入すべきことを論じて、その他の數科に論及したるなり。その職に當り、その責に任ずる諸君、乞ふ之を採擇せられよ。

寡婦論（下）

三輪田眞佐子

人は、會者定離の理にもれざれて、夫婦の契は、偕老同穴といひながら、實際良人の死する時、婦人も共に死すべくもあらず。蓋、死して良人の靈魂を慰め、一家の光榮

を增し、若くは、一國の稗益を大ならしむべき次第ならむ、生命も、鴻毛より輕からしむべし。源義高の婦人は、賴朝の女なりけるが、道ならぬわざとはいへ、賴朝は義高を殺し、遂にその婦人を、再び藤原高保に嫁がしめんとなしけれど、婦人これを憂ひて死しけりとかや。亦新田義貞の妻なる勾當内侍は、獄門の木に梟けられける良人の首を見て、傍なる築地の陰になき倒れけるが、その夜やがて翠の髮を剃りおろし、紅顏を墨染にやつし、以て嵯峨の奥なる柴の扉に終りしとぞ。

かく死にはて、あるは世を遁るゝは、なき良人をおもふ心の切なるより出でし尊き行ならむも、これより猶尊きつとめなきにしもあらず。そは、良人のこの世にあるや、必子孫長へに榮えて、その墓前の草を拂ふを願はざるはなし。遁世と死とは、本來の望にあらざるべし。故に、寡婦たるものには、遺子を養育して家運をつなぎ、然も身を高潔に有ちて、亡夫の耻辱を招がざるものこそいやまし尊けれ。されど、貞操を破りて、子孫の存立を謀るごときは、更に戒むべし。常盤御前は、名にしおふ常盤木の心はありけんも、源氏の流をたゝざらしめむやとおもふあまりにや、身をむけがしけり。固より、そが麻の如く亂れけむ心の中は、あはれむべけれども、寧ろ、今若、乙若、及び牛若の三子もろとも、雪中に凍え死にたらむには、後の世より、そはなか〳〵、梅花の操

にもまさるべしと、もてはやさるべきをそれもはゝ、天道是か非かと疑ふ人もあらん、されど、一度汚れたる身は如何せん。

古人曰く、德は孤ならず、必隣あり。と。果して、我に德あるため、人亦德を以て來るものは、その情好ひさしからんも、單に、名利を貪る目的にて集まるものは、露ばかりも恃むにたらず。見よ、良人樞要の位地を占むるため、朝な夕な、門戸を訪ひし人の、果してその孤兒を顧るもの多きか。まして良人のため、骨肉の親族すら、その寡婦をはぐくまざるのみかは、反りて遺產などを横領せんと企つるものさへありとかや。あはれ、世に恃むべきものは人にあらず、わが心ぞかし。こをもて、女子たるものは、つねに門地をほこらず、富貴に奢らず、その心を養ひて、萬一の秋に狼狽するなかれ。幸に、財貨ゆたかなる家の寡婦は、良人の死にし后にも、糊口に窮することなからんも、一家の綱紀亂れ、子孫の敎化立たざる例多かれど、女子は、幼きころより、精神を訓練して、もし寡婦となりし曉にも、鄕黨隣里の笑な蒙りそ。更に、中等社會以下の女子は、生計の道に迷ひ、他人に寄食して、失態を現さゝるもの稀なり。おもふに、寡婦なるもの、獨立獨行して、竈の細き烟だに自ら立てんには、始めて賢婦の實を見るに足るべし。諺にいふ、藝は身を助くるとかや。そを以て、女子たるものは、女事

を修むるのみならず、女性に適する技能を養ふべし。されど、寡婦とならんも悔ゆることなかるべし。亦節儉質素の慣習を作り、永遠の計營をなすべし。然るに、實際、世の寡婦を見るに、多くは、自立の力なきためにや、權勢の集る門に媚び、そがあはれみを求め、遂になき良人の名望を損ひ、子孫の墮落をさへ憂ひざるもの丶如し。凡そ人たるものは、渴せんも盜泉の水を呑まずといふ見識ありてこそ貴けれ。今日絲竹管絃のみを以て遊惰に成長する女子の末路れもひやらるべし。要するに、盤根錯節は、以て利器を知るに足る理にて、女子の賢不賢は、寡婦となりて最見るべし。すなはち、貞操を守るか、家名を有つか、又子孫を訓育するかを試みて、以て人物の値を定むべし。果して始あるのみならず、終を能くし、仰ぎて天に辱ぢず、伏して地に耻ぢざるものならんか、たま〳〵、その形影相憐れむに乘じて侮るもののあらんも、君子はこを敬すべし。天道も亦こを棄てざるべし。

敷島の大和の國に人ふたり

有りとし思はゞ何かなげかん

(讀人知らず)



実談

小夜女　菊女

鹽井ふく子

賤は至て微なるものなれども、食むに人の力を恃まず。美濃の國、海西郡、大和田村の小作百姓小八と云ふものゝ妻をさよと呼びけり。夫小八はとくみまかり、もとより賤しき家の、主人なくなりては、一入に貧しく、朝夕のけぶりもたてかねるを、さよ女、たゞ一人の娘、きくをもり育てゝ、また他に嫁がず、賤の女ながら心の誠をつくし、うみつむぎの業をつとめて、かつ〳〵世を渡れど、娘もまた野末の菊、つくりし色はうすけれど、中〳〵に心のかをりうるはしう、早く母を助けて共〳〵に糸をくり、機をれり、母子いたはりあふを互みの玉の緒として、心細き年月を送るほどに、木枯の風はあいなく、千代と頼みし一本の菊をど、またや中風と云ふ病にさそはれんとするに、小夜は悲しく、そのゝねの己れこそはまづ朽ちねとぞかりになげきまどひ、衣帶をとかず、れきまもりたるはゝその露のたまものに、足こそは全からねど、身のみはむか

しにかへりたるに、きく女はひたすらに、天の賜、母のたまものとして、身を己がものともせず、足はぬ足をつゆ省みず、いよ〳〵はげみて機をれり、家計を足らはしめんとはかりけり。

さる程に、天明二年のころ、天いたくひでりして、田畠水を損し、五穀みのらず、里人の困窮一方ならざりしかば、みな領主に訴へて、救ひを請ひけるに、領主もそのさまを、まのあたり糺し見んとて、人をその村に遣はしけるに、庄屋申しけるやう、わびしき百姓の内に、母子二人奇特のものこそ候へ、それは母を小夜と云ひ、子をきくと云ひて、母はよはひうち傾き、娘は先の年中風になやみて、足よわく、殊に女の身なれば、鍬鎌の業はたへてとり難く、たゞ木綿をれりて、かすかに世を渡り候ものなれば、人よりも先きに願ひ出づべきを、其の沙汰もなきに、いぶかしみて、尋ね候に二人はなほ固く辭み候へば、其の心にまかせて、救の中をのぞき候が、二人の住居のさま、見せまほしと聞えしに、使もさらばとて、行き見るに、げに家はいたくわれはてゝ、庭もまがきも一つ野らとなり、屋はやぶれて雨も風もとまらず、見るから涙さへもれんばかりの住居に、常に用うべき調度とてもなきに、二人あらたへの衣をまとひて、きり〳〵とくだまく音あはれに身にしみて、誠にわびしげなるに、使いたく

あはれに覺ねて、今一村すべてそが食を請ひけるに、汝等はなど願はざると云ふに、母はとく機殿を下り、まばらなる歯をあらはして答へけるやう、誠にわびしき親子、さやうに思し付けらるゝはうれしう侍れど、今年は君の治め給へる土地の貢、なべて少きよしを傳へ承れるに、私等二人がとる手業も、綿の價高くして、利も少く侍れど、されど如何にもして命ばかりをつながんほどに、君が御惠みをわづらはさまじと存じて、兼ねて辭し候ど、霜深きれどろの髮くり上げて答ふれど、娘もたゞ〳〵機より下りて、固く辭みけるに、領主その由を聞き、いたく感ぜられ、やがて其の心を賞美して、錢若干をとらせけるに、二人は思ひもよらずもの給はれるうれしさを深くよろこび、それよりなほ一心に賤のをだまきくりかへし〳〵、やがて一反の木綿をあつくしたてて、領主にけんじけるに、領主もその志の切なるをめでゝ、永く納めれかせしとぞ。一村擧つてわび出でけん、秋陽に、ひとりほこらんとする二人が心の操は、長く、機織虫の音につたはりて、やさしくぞ聞ねける。

島屋半兵衛の妻倉女

五十園德文

倉女は野州宇都宮なる押切町に住みし島屋半兵衛が妻なり。生れながら孝貞の心ふか

かりき。子は女子一人ありき。半兵衞身修らずして、こゝかしこに金錢の借債つみて山の如くなりしかど、家を整ふることあたはず親をも養はず、おのがふるさとにも住みかねて、ひそかに里をのがれ出でゝ遂にゆくへ不知なりぬ。倉女はこれより一きは心をはげましつゝ、人の爲に、裁縫よりすゝぎ洗濯などをし、かつは男の業をもつとめながら舅姑を養へりき。かくてあること十年の後舅姑ともに病みてうせにき。倉女心のかぎり看護いたらぬくまもなかりしかど、近所合壁みなほめ稱へぬはなかりけり。さてあるほどに、人くら女にすゝめて、婿を納れしめんとせしに倉女ふつにうけひかず、心うごくべくもあらざりければ、このことも遂にやみにき。半兵衞のがれいでゝより、江戸にのぼり人にやとはれて僕となりて日を送りけるが、妻の孝義を人傳ながらきゝ感じて、さきの過を悔ひあらためて、これよりは、歳ごとにおのが俸祿若干づゝを贈れり。かくて又十年を經たりしが、人ありてこの二人が志をかなしみて、半兵衞が爲にもとの負債主がもとにゆきて、その罪を謝しゝかど、半兵衞もこゝにはじめて故郷にかへることを得たり。さて、妻倉女に深く恩義を謝してもとの如く夫婦となりて、一生をおくりきといふ。一心まことならば鬼神も感動すべし。況して人をや。倉女始終一日の如く、難にあひて志を渝へず。懦夫も爲に心を改む、すぐれたる婦といふべし。一旦夫にげ

てゆくへを不知、心をつくして舅姑を奉養し。山川のわれても末にあひ〳〵て再夫婦の義を全うす。孝貞二つながらかなへりといふべし。浮薄のもの見て鑑とせよ。

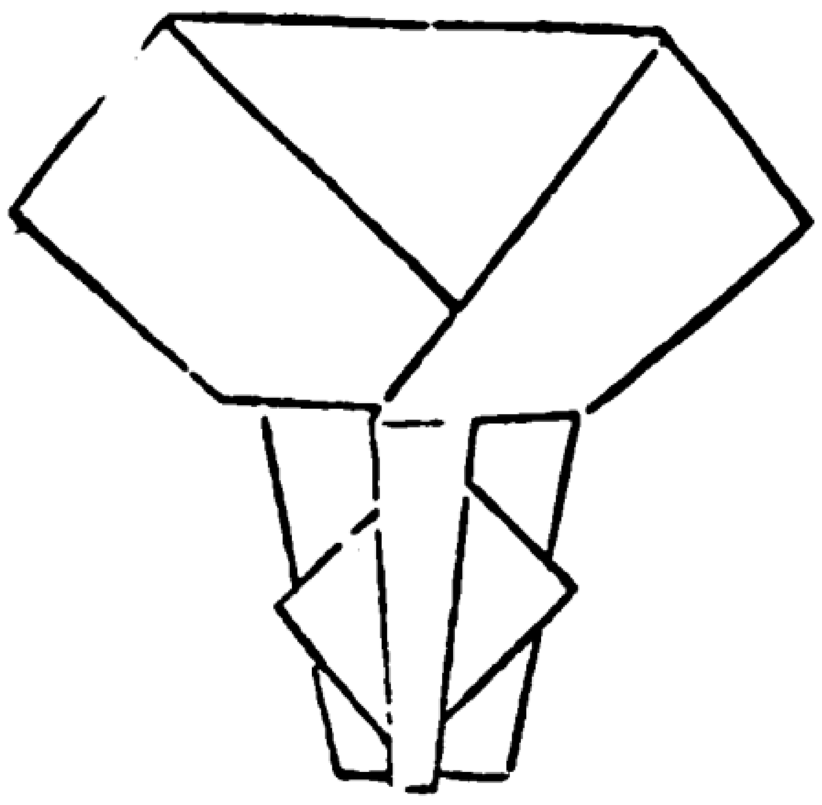


家政

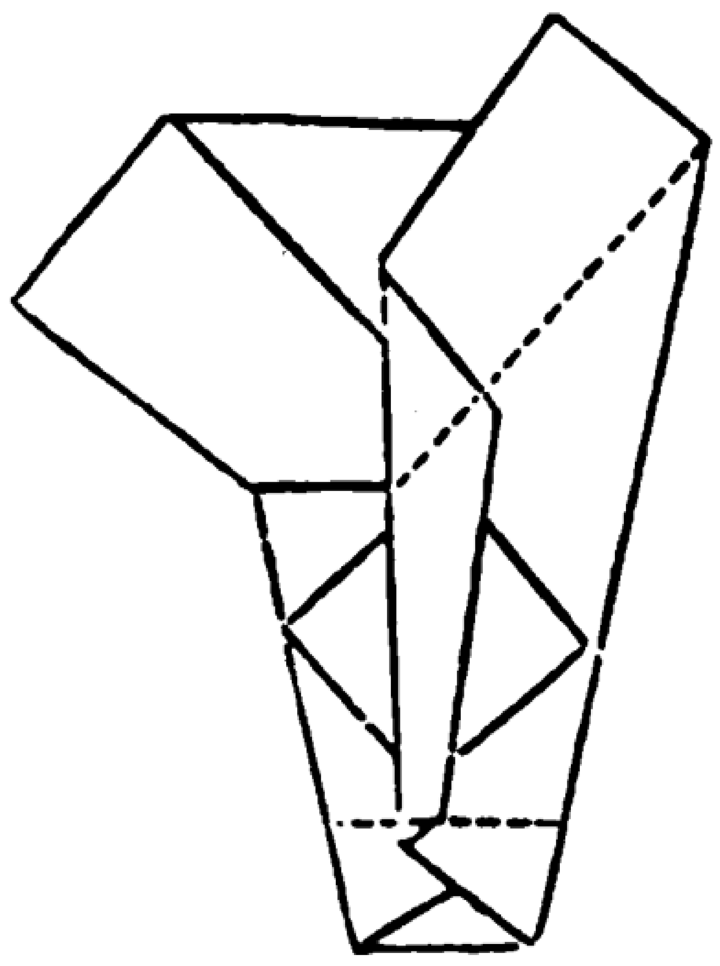
折形

有住齊

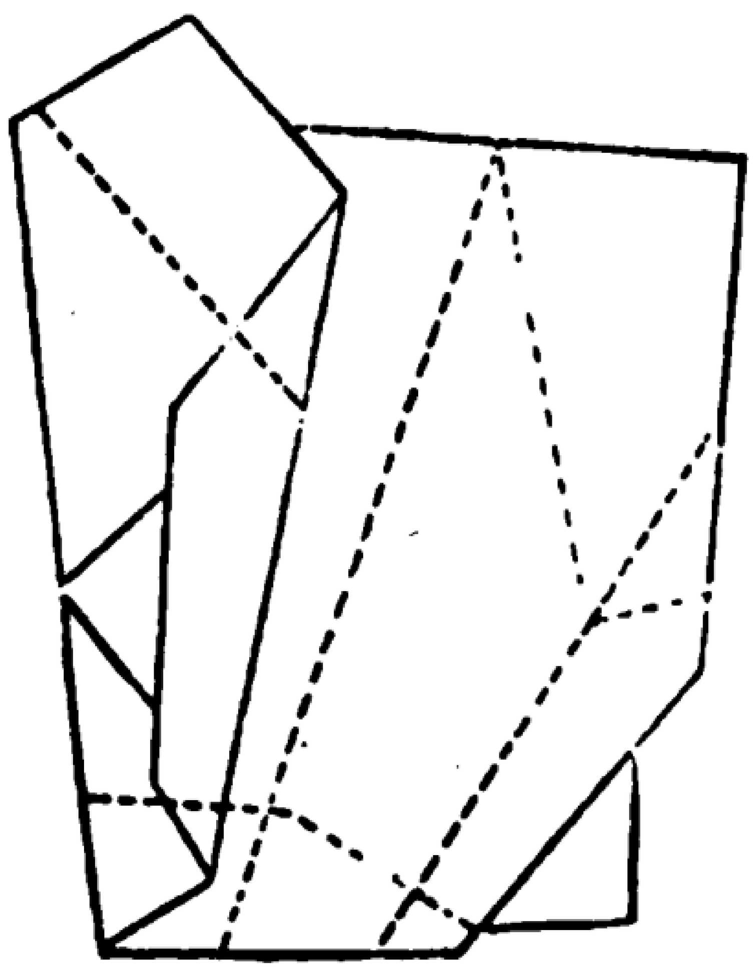
下結を裏より通し中にて結び水引をかけてくゝるべし。扇子包に仝じ。



的矢包

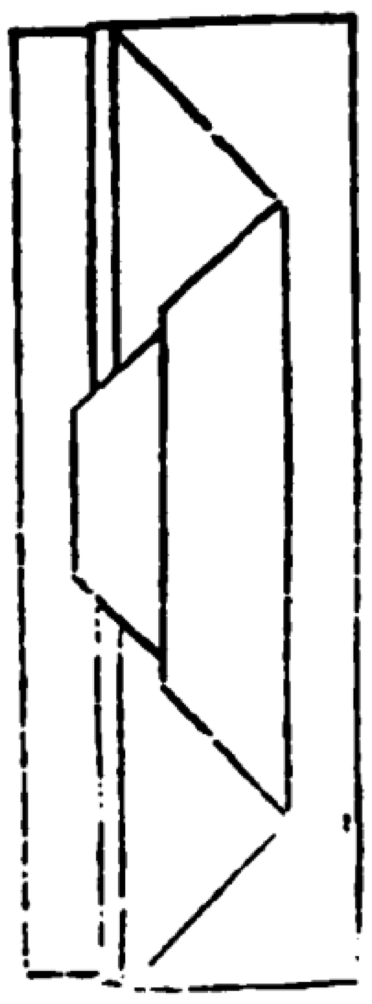


仝じく右の方上と下の折り返しとを開きたる處

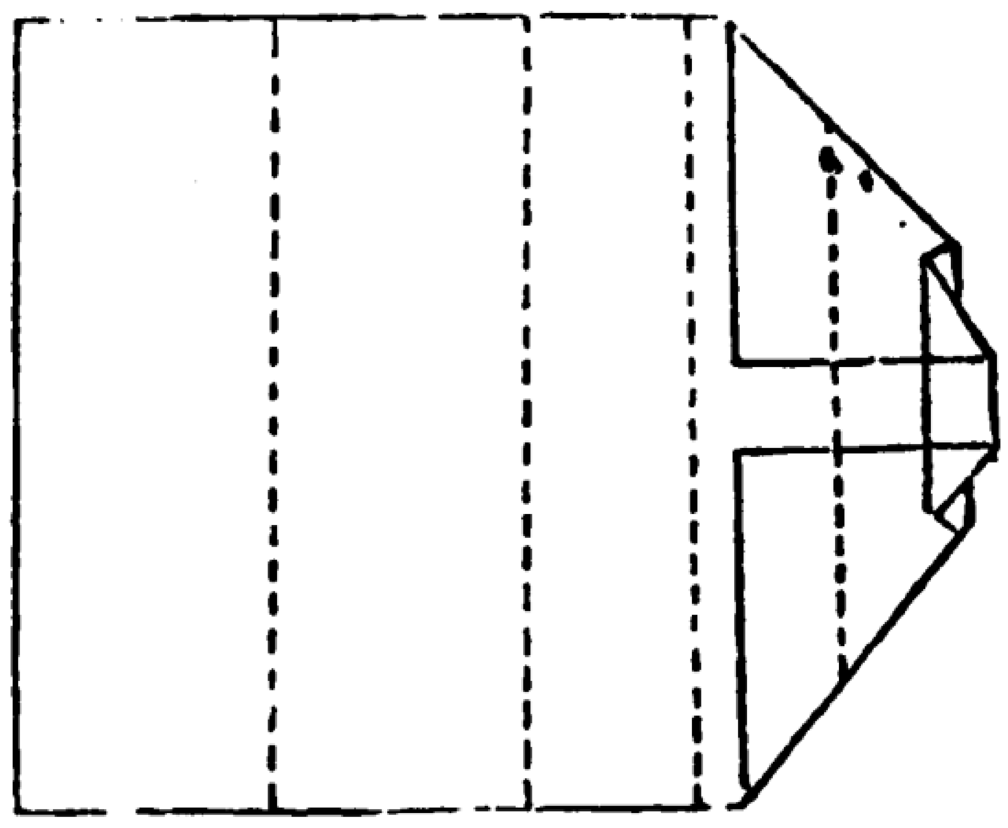


仝じく右をズッと開き、左の上を開きたる處

縣包



書付　弽一指と書くべし。

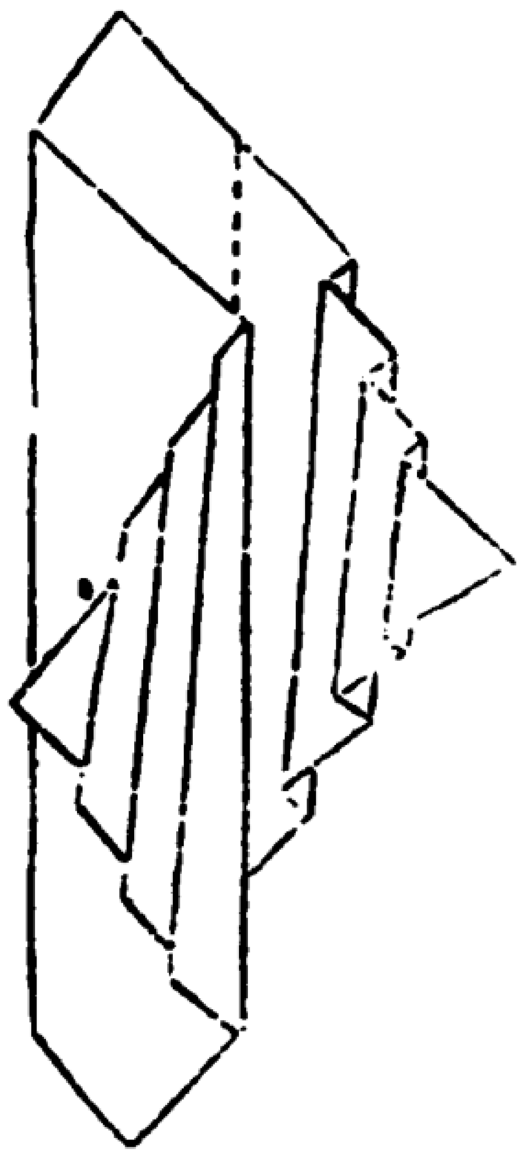


全じく兩方を開きたる處

太刀帶取包　書付なし。



全じく右を開きたる處



茶の湯

孤峯庵祿仙齋不羨
關　葦雄

濃茶手前　四疊半點

先茶碗を右手に持、左手を添持出、敷居の上も、道具疊も右足より踏入、道具疊炉の正中にて留りてつくゐひ、持たる茶碗を左手に持替、左の方、壁或は障子の際より、茶碗一つ丈明けて、膝頭の通りに置付べし（是を假置と云、以下假置の稱、準じて可知）次に右手にて茶入を右の方へ寄、左手にて茶碗を持、右手を添、左手を茶碗の中程に持替、茶入と置合すへし。左右の手を膝上に取、立て、右手左足、又右足と、三足跡に引、後ろに廻り、水屋に入、翻、柄

杓、蓋置を持出、道具疊に至り、炉の眞中に止り、炉の方へ七分三分に向て座すべし(座すると同時に、飜も下に置くべし)先飜に掛り居る柄杓の中節の直下を左手にて持、前に持來るうちに、柄杓の合我か方に向樣になして、柄の元の處へ右の手をかけ、風爐薄茶手前の時の如く柄杓を準へ、合を鏡に見て後、右の手を放し、左の手を左の方へよせ、右手にて飜の中に在る蓋置を持、膝の前に持來り、向を改め見て、鍵疊の縁際、疊目三ッ目に置、爐縁の方も見計ひ、三つ目となる樣にすへし。次に、右手直に柄杓の元を持、倒しながら向へ押出し、眞横になし、右手を柄の上より持て、左手を放し、靜に蓋置の上に持徃、合を掛て後、柄の方を置べし(是を二段置と云。尙、此手の放し方に口傳有、前に如レ言 柄杓の合を蓋置にかけて、柄の方を靜に下げて、右の手首に力を入、四本の指先より疊へ落す樣にすへし)次に、居前を能々直すべし。炉に向ふ見當は、爐縁を三つに割、左の方一分を我が身体の正中に、向の方は釜の鐶付を見通すへし、膝先を成丈廣く、左の膝頭の左の側を、爐縁左の方外隅摺排にすれは、大概居前定るものなり。(尙實際の上ならでは、口傳の活用も薄し、良好の宗匠に付て學び玉へ)体格直しかた調はゞ、左の手にて飜を出し、後一禮すべし、(但此一禮は、茶入、茶椀、柄杓、飜等身體に接近し有る事なれど、縱令、貴人の賓客たりとも、心持を謹愼にして、高尙に時宜すべし、敢て僻屈にするに不及)先左手にて茶碗左の方の中程を持前にして、右手にて右の方中程を篤と持、爐縁と膝先との間前へ茶入を置丈の餘地を見積りて置、次に右手にて茶入を取、直に茶碗と膝との間に置合すべし。次に左右の手、名差指にて茶

入の結左右に出たる輪を突てゆるめ、直に左手は茶入の肩に掛て、右手は茶入の緒結解かゝりたる所を持、前へ引延し、下の結目を解べし（結目を引時には、名差指と拇指と二本にて持、拇指を下にして引張、いつぱいに引きたらば緒一つねじれ有るもの故、拇指を上にすれば、ねじれ直るものなり）次に、其の緒を右の方へ持往、直に両手の指先にて茶入の緒の打留を左の方へ廻し、次に、左手にて打留を持、右手にて、つかりの端を押へ居て、左手打留を持たる紐を、左の方へ一寸程引出し、次に両手の指先にて、つがりの向の方を左右へ延て、次に前の方も、全じくつがりを延し、右手にて茶入を持、左手の掌中へ受け、先右手にて袋の右の方を下へ脱せ、左の方も同く脱せ、右手直に茶入を持、左手にて袋を下の方へ脱せ、右手も今一應能念を入て茶入を持直し、左右一所に引離す様にして、右手の茶入を、又茶碗の前に再び置べし、次に左手に持たる袋のつがりを、左右の指先にて能延し、右手にて打返し、袋の底を右手にて持、紐の向に置付べし。

（以下次號）

女の禮

禮節教授　有住常子

小座敷にての禮

是は貴人、御逢ある時の禮なり、まづ敷居そとにいたりて、左足を半足ひきて、左膝を跪き、右膝をも跪きて、右膝頭に右の手掌をそへてあとへ引、左膝頭へも左の手掌をそへてあとへ引て、この様に引侍る時、左を引て、右の踵をれろし、左を引て、左の踵をれろして平に居るべし。

さして、双手を出し、頭をたれて、御禮申上るなり、
（御禮の仕樣は座禮の最敬禮に既に出せり）
この時、貴人、近くへと仰せある時、兩手を其儘に
進ませ、敷居を三度にこゆべし。
（こゆる樣は、兩手を進ませ　に右膝左膝と
進ませながら爪だて、又兩、　右左膝、又兩手、
右左膝とこゆるなり）
右の如くにして、進み入て、踵を平にして、又御禮
申すべし。
この時ふたゝび、近うとある時、そと御受の禮をな
し（前の仰の時にもかく御受の禮とて、頭をさぐる
事あるべし）
右手と左膝を進ませ、左手右膝と進ませ、かく、か
はる〳〵に這て、
○まをすまでもなく侍れど、進み侍る時の足は踵を
爪立たるべし。
さてよき程まで、進み出て、又御禮申あげて、兩手
を膝の脇にたれ侍りて、御咄をうけたまはるべし。
かくて、退き侍る樣は
右手左膝、左手右膝と、かはる〳〵退きて敷居外ま
で、逆に這出るなり。
敷居そとにて、前にはしめて居りたりし處にいたら
ゞ、又御禮申して、右膝頭に右の手掌、左膝頭に
左の手掌をつけて、右を引、左を引ながらつまだて、
右膝頭をうかして、左膝を右によせて、右にひらき、
其のまゝ眞直にたちて、右足左足と、おとひさりし、
右足を三度目に左足の後につけ、次に左足を右足の
爪先につけて、踏そろへて、後向になりたる時、左
足より進みて退くことなり。
この禮は、いと古代よりある、匍匐禮と云ふも

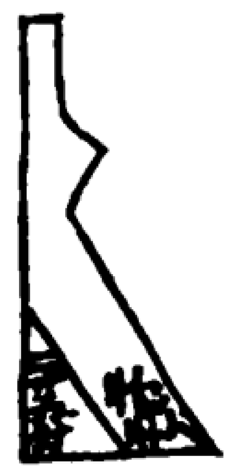
のにはあらず、ちかく足利の代に定制られたりし禮に侍り。
このやうに手重なるは、益なき禮どもれもふめれど、さには侍らず、時により處につきて、かゝらではかなひ侍らぬ事あなり。
○常に、座禮の進退に、むねとならひたるべき禮に侍るめり。

たちぬひ

西山たい子

(八十二)　股引縫ひ方

まづ紐の切を眞中を三尺ほどあけて一寸巾に絎けれき、また襠の切れ此の如くに、

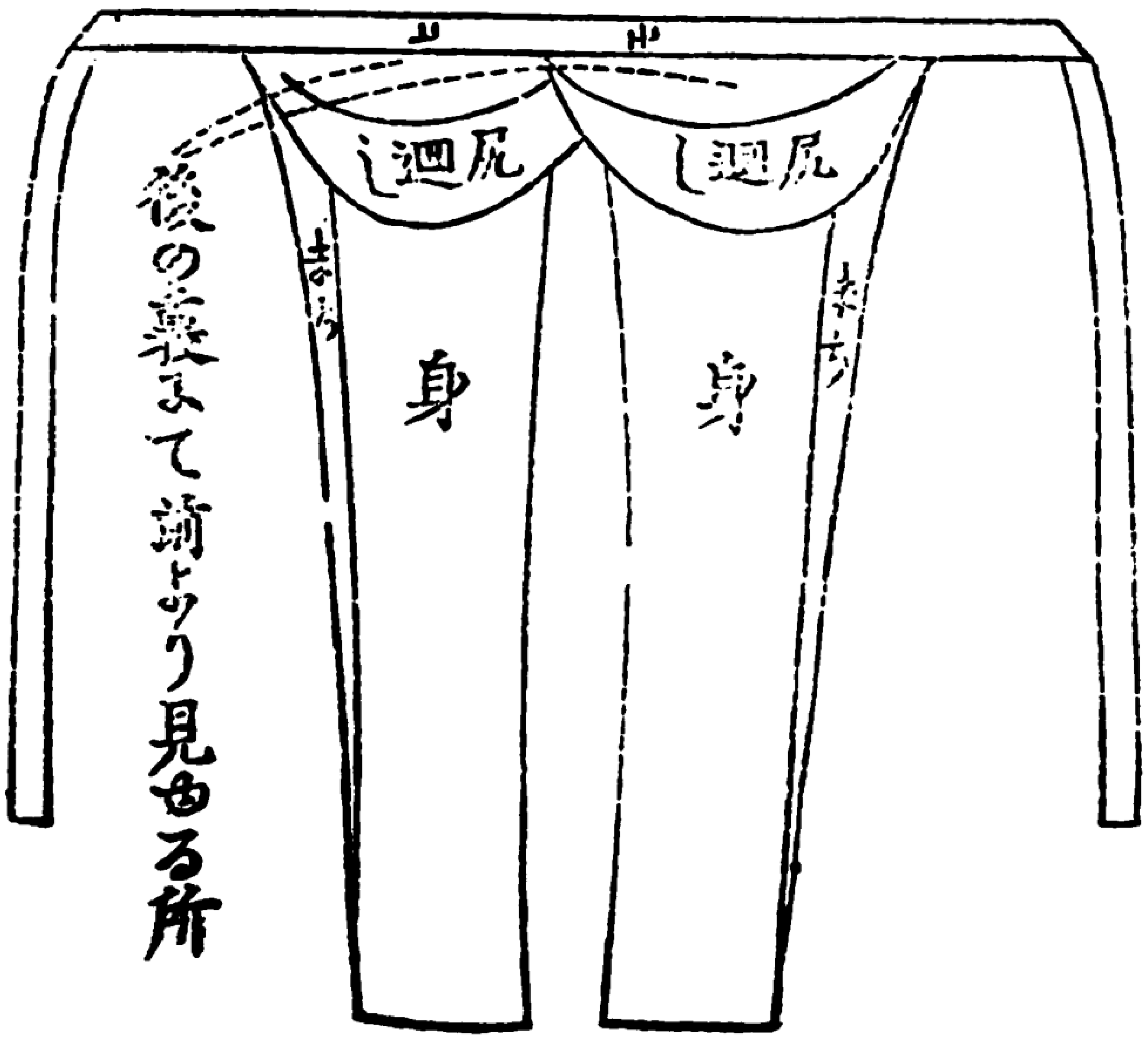




即ち上圖の如きを

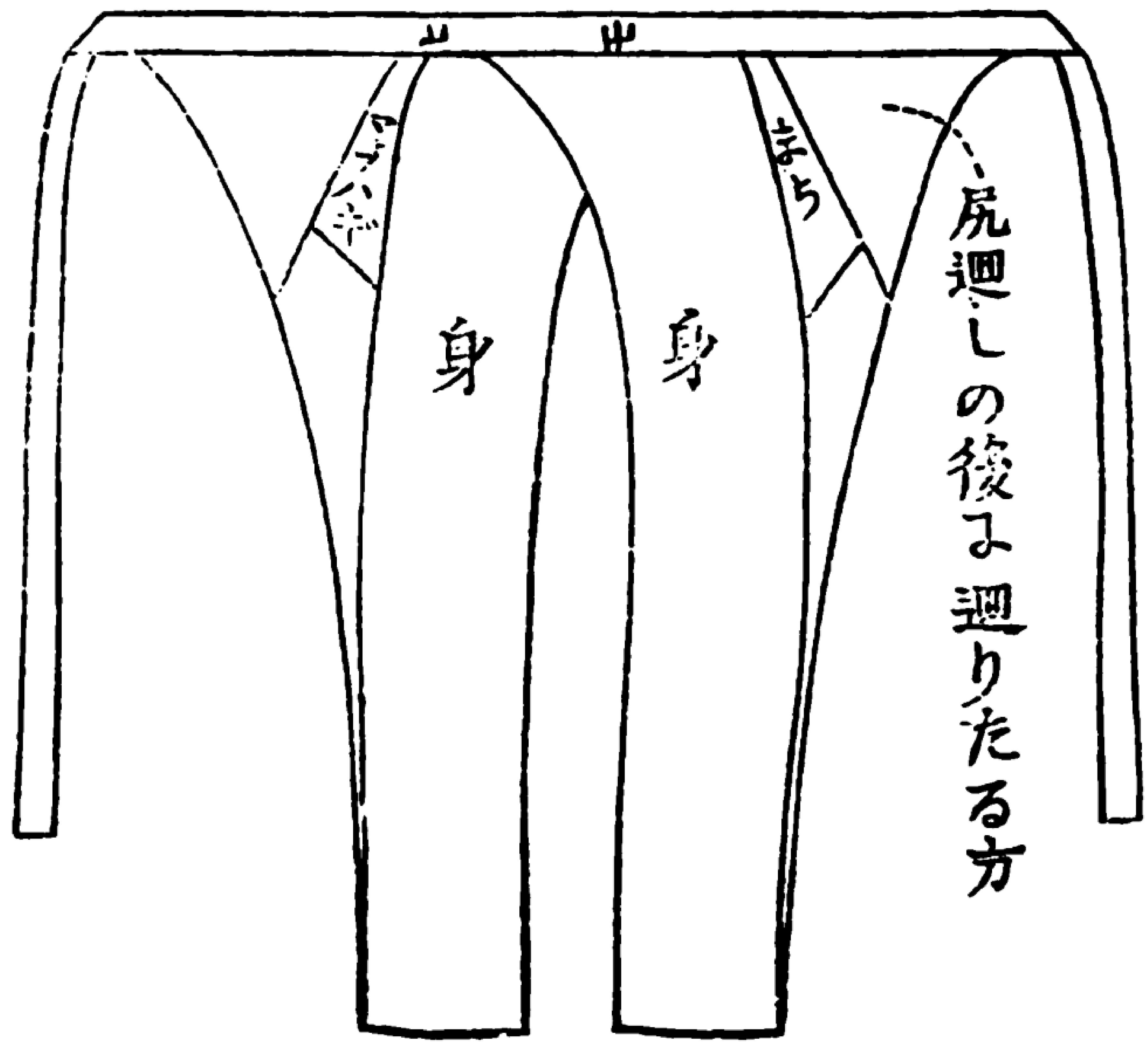
はぎれくべし。但、長き方の裏表合せたるものを、短き方の裏と表の間にはさみてぬひかへせば、ぬひめ裏にも表にも出る事なし。それより身の切れをと

その前圖



り、足元の出る所の口を裏表ぬひ合せ、裏を表より二分ばかり引きこむやうになし、次の身の下一寸落したる方の端にて、襠をはさみてぬひ、引きかへし

その後圖



て、次に襠の一方を裏表共に身の一尺七寸五分の處にぬひ合せ、次に尻廻しの切の股下になるべき方をぬひて、のち他の二方を身の襠にぬひ合すべし。左右ともに、ぬひ終らば、其の左右のものゝ、後になるべき所を六寸かさねてぬひ合せ、それより紐をとりて、その明ある所に表の方をぬひつけ、裏にて絎るなり。

造花

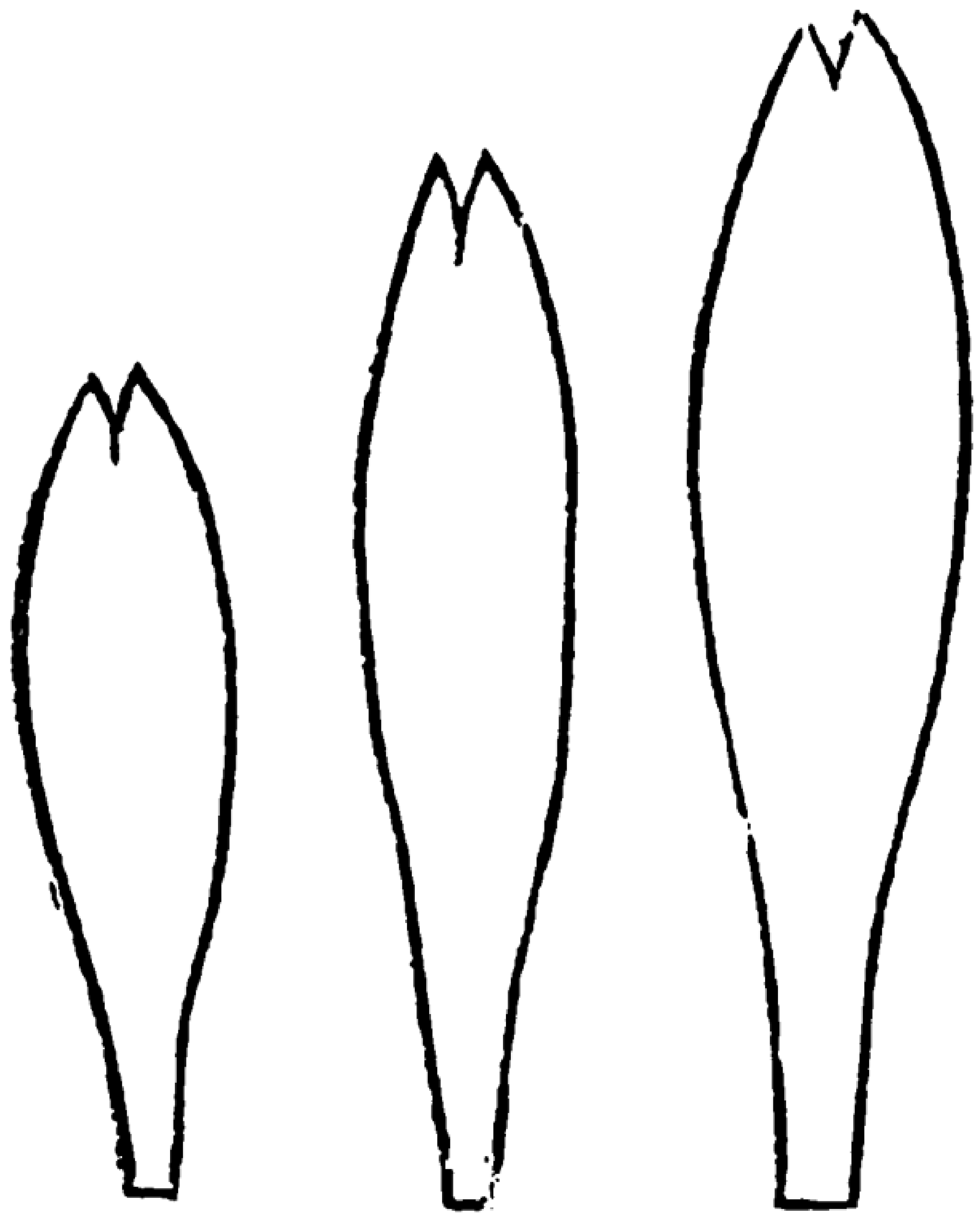
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

菊 蜀紅錦

滿開花の造り方　花瓣は絹(絖、羽二重)又は寒冷紗にて造る。絹なれば、先づ、絖を採り、表に竹籤を

張り、裏より、葛を薄く溶きて引き、乾して后「スカレツト」にて赤く染め、次に、羽二重を「オウラミ」にて黄色に染む。右何れも乾して后、第百十二圖の如く、大中小三種の大さに、絖、羽二重共、名々、大四十枚、中三十二枚、小二十四枚を造り、之を極少しく(濡れ手拭の上に置きたる位)に濕し、絖を内部に、羽二重を外部になる樣に、それ〲重ね合す。寒冷紗にて造るには、先づ之に竹篏を張り、普通の葉と仝じ位に濃く糊を引き、乾かし后、表を「オウラミ」にて染め、又能く乾して、

第百十二圖



裏の方を「スカレツト」にて染め、以て、絖と羽二重とを合す代りとなし。大、中、小、前と同數に造るべし。さて、大の花瓣は、二筋の菊鏝にて、瓣の中程を、先より元に引き、兩邊を小の瓣鏝にて引くべし。(總て、鏝をあつるときは、花瓣は、手拭、又は布片を少し濕して疊みたる上に載せ、鏝は少しく熱すること、前々に述べたるが如し、忘るべからず。)中の花瓣は、大と仝じ樣にして深く鏝をあつべし。小の花瓣は、先端を深く凹む樣に、鏝の先に力を入れて、大と仝樣にあつべし。

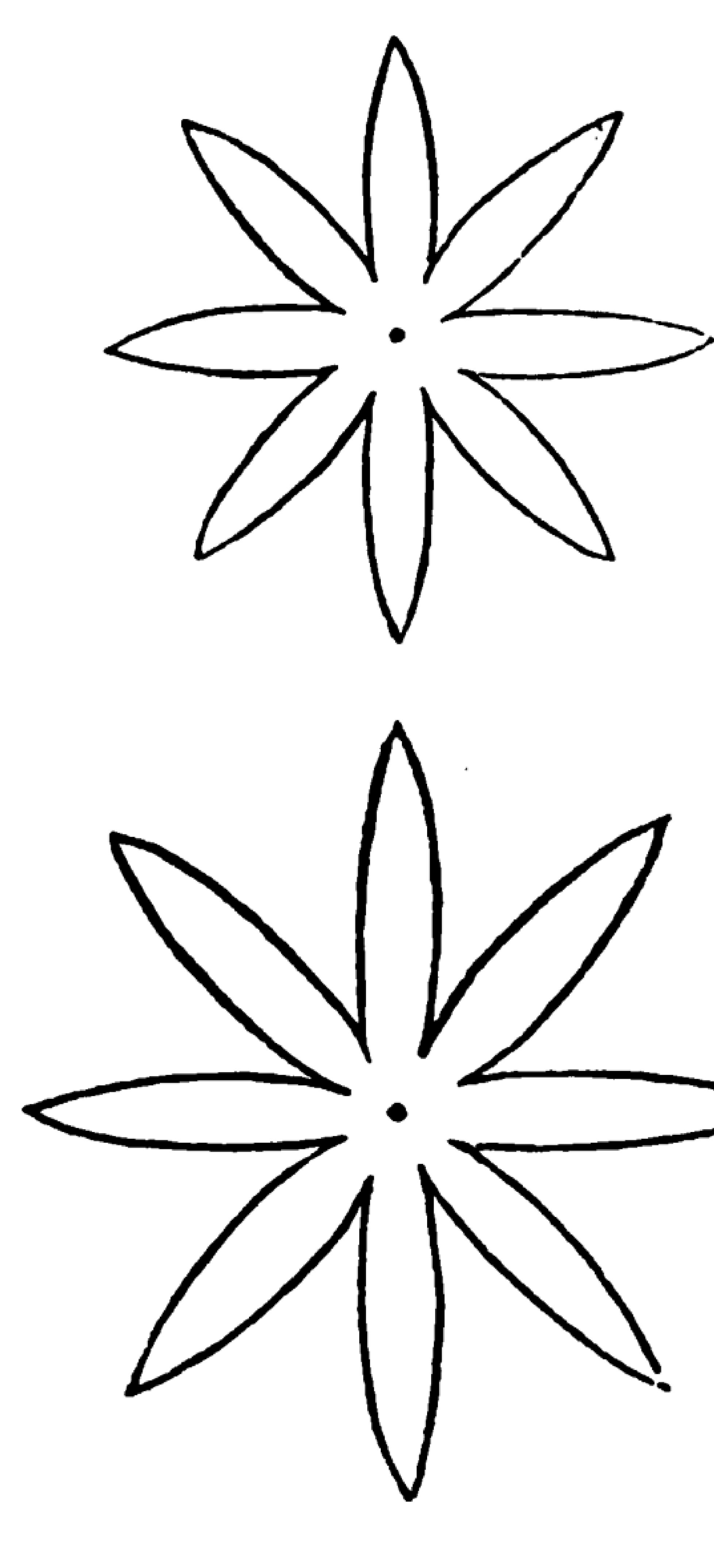
蘂は、三子の黄色の木綿糸を、通常の一挊を二ッ合せ、其の中部を眞鍮の針金にて固く絞り、(此の絞り余りの針金は斷たず其儘に伸して莖の眞となす)其の絞りたる處を曲げて、其處より凡三四分の處を、兩方一處に固く、亦眞鍮の針金にて縛りて止め、其

の先を斷つべし。(倘本誌第百二十號造花菊の蘂の造り方を見合すべし)斯くして蘂をつくり、其の蘂の中央に「グリン」の溶液一滴を落し、之を筆の先にて中央濃く緑薄くなる樣に模糊す。さて斯の如く造りたる蘂に、先づ、花瓣の小四枚を向ひ合せて着け、又其間々に四枚を配り、漸次斯の如くして、小二十四枚をつけ終り、夫より、中三十二枚、大四十枚を着け(總て斯の如く、數多の花瓣を着くる場合には、一枚を着くる毎に、各々元に鏝をあて、乾かすべし)

悉く着け終りたらば、之を倒にして暫く吊し置き、蕚を造るべし。

蕚は、寒冷紗を、第百十三圖の如く、大小二種の形に斷ち、「グリン」と「ヲウラミ」とを等分に溶きたる液にて、餘り濃からぬ樣、中央濃く緑薄く模糊し、乾きて后、茶粉にて全躰を染む、之に、小の菊鏝を、大の花瓣の如く、餘り凹まぬ樣にあて、さて此の中

第百三十圖



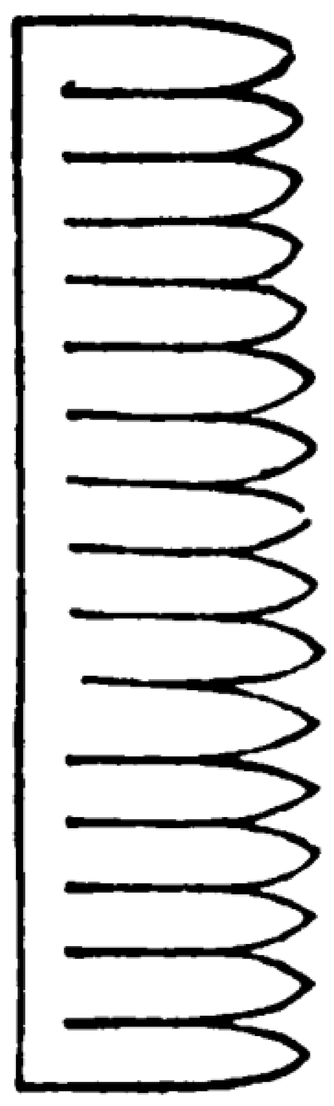
央に小さき空を明けて、前に造りし花の元に、大を先に、小を後より差し込みて、糊にて固定すべし。

半開花の造り方　は、滿開に用ゆる花瓣の中と小とのみにて、全じ數を用ゐて造る、尤も鏝は、滿開よりも深くあつべし。其他總て滿開と全じ。

大の蕾の造り方　蘂の糸は、滿開に用ゐしもの丶半分を以て、全じ仕方に造り置き、花瓣は、絹ならば、紬、羽二重。木綿ならば、寒冷紗。何れも滿開のも

のと同樣に染めたる布を、紅を內部に、黃を外部となして、第百十四圖の如く切り込み、切込每に、內部より小の菊鏝をあて丶能く縮らし、元の處に糊をつけて、前に造り置きし蕚の廻りに卷着くべし。

第百十四圖



小の蕾の造り方　太き針金の先に綿を適宜の太さに卷きつけ、其の上を濃き糊にて固めて第百四十四號に示したる南天の實と仝じ樣に造り、乾して后、之を「グリン」三分「オウラミ」八分の割に合せたる液にて染め、后、筋鏝にて、菊の蕾の風に頭に筋を入れ、倘先を少しく凹む樣にすべし。之を葉に用ゐる蠟の溶きたる中に突き込み、直ちに引上げ、余りの蠟を振り沸ひて乾すべし。

葉の造り方　葉は、伽羅子、又は寒冷紗を、「グリン」三分「オウラミ」六分「マセンダ」一分の割にて溶きたる液にて染め、之に糊を引き、之に「レモンエルロー」と「セルリン」とを等分に熱湯にて溶き、（溶き方は染粉一分に熱湯一合の割とす）冷めたる后刷毛にて引く、形は實物を取りて、夫に合して斷ち切り、裏より針金に青紙を卷きたるものを着け、筋鏝にて筋を施すべし。

さて、以上の滿開、半開、蕾、葉等を適宜に配り整は、中に竹の削りたるものを入れ、上は青紙にて卷き恰好能く造るべし。



だいどころ

煮残の羊肉調理

煮冷しの羊肉を能程にきり、「フライ」鍋に牛酪をときて此中に投れ、褐色になるまで煮付け、煖めたる皿に盛り、めさざるやうに蓋をなし置き、其あとへ、赤茄子二個を、二ッ切となしたるものと、鶏卵一個をときたるものとを投れ、二三分間煎付て、肉の側に盛り、あたゝめ醤をかけて用ふべし。

煮残の豚の調味

煮残りの豚の脂肪を去り、よき肉のみを五分程に切り、球葱を細かに刻み、「フライ」鍋に「バタ」を溶して、肉と共に其中に投れ、能煎付たる後、浅き鍋にうつし、米利堅粉、胡椒、食鹽、芥子等を能程に加へ、尚少量の酢を和し、凡十二三分間徐に煮るべし。

「カレー」粉にて煮冷しの牛肉
鳥肉の調理

先づ、煮冷したる牛肉鳥肉の内、いづれにても、之れをさいのめにきり置き、玉葱を細かに刻み、又林檎一個を細かに刻み、「フライ」鍋に牛酪をとき、葱と林檎とを煎付け、其褐色になりたる頃、之を浅き鍋に移し、「カレー」粉、及び米利堅粉を加へ、又肉汁を注ぎて能かきまはし、凡そ十分間程文火にて煮たる時、肉を投じ能くかきませ尚六七分間煮て、少量の柚子の汁を和し、直に温き飯と共に器に盛て出すべし。

蜜柑砂糖漬

質よきものを撰み、皮を剝き能程の鉢に投れ、蜜柑五十個に、白砂糖一斤、焼酎一舛を投じ、蓋を密閉

し置き、凡一ヶ月間を經たる後用ふれど、其味佳良にして、尚數月を經るも味ひ變る事なし。



秀歌集（十二）

鹽井正男

○

みよし野の山の白雪ふみわけて
　入りにし人のおとづれもせぬ

○これは、古今集の冬歌の部にありて、壬生忠岑の歌なり。忠岑は、古今集撰者の一人なり。○みよし野。大和の吉野にて、みは美はじみてよぶために、冠らせたる詞にて、紀州の熊野を、みくま野といふも仝じたぐひなり。○入りにし人。吉野の山深くこもり入りたる人なり。○おとづれもせぬ。音さたもきこえぬ事よと嘆せるにて、おとづれとせぬとある末に、事よといふ如き詠嘆の詞をあましたる詞づかひなり。入りにし人のといひて、のの係りなれど、おとづれもせずと結べど、よのつねの係結なるを、かく末を結びたるは、詠嘆の詞をあましたる詞づかひなり。かゝる所を、よく心して見るべし。

○一首の意は、吉野山の白雪をふみわけて、吉野山の奥ふかく入りて、こもりたる人が、其の後、少しも音さたもきこえぬワイ。如何にしてならむ。山の雪がます〳〵降りつもりたるによりて、音さたもきこえぬにや、若しやまたきくこともかなはぬ

悲しき事に成れるにあらずや、わづらひてにもあらずや、いとゞおぼつかくおぼゆるワイと、吉野の山ふかくこもりたる人の上を、おぼつかなく思ひ玄たへるにて、情といひ、詞といひ、調といひ、やさしくもやさしく、身にしみておぼゆるかなしき歌なり。

○

夕されば衣手さむしみよし野の
　　よし野の山にみ雪ふるらし

○これも、古今集の冬歌の部にありて、同じくみよし野の山の雪につけての歌なり。よみにし人は知れず。○夕されば。夕べになればといふことにて、なほ春になればといふことを、春さればといひ、秋になればといふことを、秋さればといふと、おなじたぐひの詞づかひなり。春さればと秋さればと、例を一首づゝあぐれば、萬葉十の卷に、「秋さればおく白露に我が門のあさぢが裏葉色づきにけり」「春されば卯の花くたし我が越えし妹が垣まは荒れにけるかも」○衣手さむし。衣手とは、衣の袖の事なり。「君が爲め春の野に出でゝ若葉つむ我が衣手に雪はふりつゝ」などいへる衣手に仝じ。袖さむしとは、寒さが袖にとほりて、身のしみわたりて寒きことなり。○み雪ふるらし。雪が降るらしいと推量したる詞なり。らしは俗にラシイといふ意にて、やゝ證據とすべきものによりて、推量していふ意なり。こゝにては衣手の寒さといふ事を證として、吉野の山に雪ふるらしいと推量したるなり。

○一首の意は、夕べになれば、袖もとほりて、身にしみわたりて寒い。吉野の山には、かくては、雪

が降るらしいといへるなり。さしたることはあらねど、一首の調はあはれに、何となく身にしみてればゆる歌なり。

○

みよし野の山の白雪つもるらし
　故郷寒くなりまさるなり

○これも、全集全部にありて、坂上是則が、奈良の京にまかれりける時に、やどりける所にて、よめるなり。○故郷。奈良の京をいへるなり。昔、皇居のありし所なれば、故郷といへるなり。

○一首の意は、今夜は、吉野山の雪が、いたく降りつもるらしい。されば、この故郷も、いよ〳〵寒さがまさりてればゆるといふことにて、前のと同じやうなる心の歌にて、同じく共に二段ぎれの歌なり。されど、前のは、第二句と末とにてきれ、これは、第三句と末とにてきれたり。されど、前の方、やゝ古風の態なり。また、前のは白雪を後になし、これは白雪を前にいへる所、よみざまはうられもてあり。

○

朝ぼらけ有明の月と見るまでに
　吉野の里に降れる白雪

○これも、坂上の是則が、大和の國にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめるなり。○朝ぼらけ。夜のほの〴〵とあけそめたる頃をいふ。此の句の下に見わたせむといふやうなる語をれきて見るべし。即ち、朝ぼらけに見わたせむといふやうに見るべし。○有明の月。天に月のありながら夜のあくる頃を有明といふ。されど、ありあけの月とは、その頃の夜あけに天に殘れる月をいふな

り。

○一首の意は、朝ぼらけに見わたせば、有明の月の光りと思はるゝばかりに、吉野の里に雪が降つたワイといふことにて、こゝにあげたる歌は、皆吉野の雪によれる歌にて、前の三首は、吉野の雪を身にしめたる歌にて、この一首は、吉野山の雪のけしきをながめてよめるなり。

昨日といひ今日と暮らしてあすか川
　流れてはやき月日なりけり

○これも、全集全部にありて、春道列樹が、年のはてによめるものなり。○あすか川。あすか川の如くといふ意なり。あすか川は大和に在り。而して、此のあすか川といひたるに、面白く巧みなるあやあり。あすか川のあすは明日とも通ふ故に、昨日今日明日といふやうにひゞかせたり。かゝる手振りに、心をとめて見るべし。○月日なりけり。月日であるワイといふことなり。

○一首の意は、昨日といひ、今日といひ、また明日となり、かくはかなく暮らし來たれる中に、はや既に年の暮れにも成つたワイ。月日は、誠にあすか川の流れの早きが如く、早くすぎゆくものであるワイといふことにて、年のくれに、月日の早きことを感じてよめるなり。

ふゞくろ　第七稿

下田義天類評論

第十二

原文縣居翁作

過し日は御さかなくだされ忝らなむ。いそかしくて御答ひ得せでなむ。彼の道行ぶりやうやうと直し

つ。夜九つ時まで三夜、ひる半日あらため、朱などしてまゐる。かゝる物は、時々人も見、後にも殘るを、大かたにて出されては后のためわろし。いそがぬ事なれどなり。今一度よく書きて見せ給へ。其の上にて出し給へ。猶わろき事、たらはぬ事は直しつ可し。歌の末などの書玉ひやう、わろくて聞ゑがたし。所々も、よき所とわろきと有り。直しにて知り賜へ。ものゝあやきれを能く　その所々てにをはをたしかに　またいひ殘したるをも心して殘すなり。一紙は、うすゑふかなどを、高さたけ九寸か八寸をかりに切りて書き給へ。此の紙はたけ高過ぎてわろし。横は本の見あはせなり。今少字をあらあらと書き給へ。見ゑかぬる所々有り。書きたるものは、誰かいそぐとも、半年も能く錬りでいださずぞ、みづからの恥なり。よりてたゞのれなどは、如何なる御方のいそぎにても、必心の限ねりてならでは出さぬ事なり。それほどの長き事をぞ、こゝに直すとても、廿日卅日も經て出來るぞ良き。今日たてし候ひて、あすなど宣ふはいといとかろかろし。

添削をせつきたる者への御返事と見ゑたり。歌にまれ文にまれ、苟且に詠み捨て書き去らざりしは、此の翁の、斯道を重みじ給ふよりの御謹愼なり。故に其の門下生にさとし給へる御詞にも、かくの如き事常に多し。此の翁に對して旅行日記の添削を急がず。この御嚴誡有る、素より其の所と云ふべし。

抑、歌文をいやしくもせざるは、猶此の翁のみに非らず。道を重ずる古今の先達は、皆かくの如くし給はざるはなし。ことに、人にも見せ、後にも傳

へひとするほどの物をも、心の限ねりに錬りて、ゆかみを削り、ひずみを去り、皺をも伸し、艶をも添へて、目めく耳だゝぬやうに仕上げて、偖后に手許を放す可し。これ學者の深く愼む可き所なればなり。詠歌大概幽齋の抄に

彼日休は百錬して字をなし、千鍊して句をなす、と詩人玉屑に見えたり。山谷も季鍊月鍛とて、季に練り月に鍛へて案じたり、と序文に見えたり。貫之は、一首を十日廿日に按ぜしとなり。

と云へる所あり。一篇の詩一首の歌だに然り。ましてそれより長大ならむ物を、僅に時の間、若くは二三日の程に書き納めむとするは、大膽と云はむよりは、寧無的炮の向ふ見ずとぞ云ふ可からむ。射を習ふ者の談を聞くに、引込みてためらふ程なく直に切りて放つものをば、早氣の病と云ひて、深く警誡を加ふと云へり。さてまた、其の妙境を聞くに、

躰度と手腕と一定して、氣息凝り、ねらひ動かず、縣的わが矢尻に附着して、露ばかりも搖がざる時、暫凝視すれば、其の的双眸の間に收歸して、終に脳裏に鎮定する一時期あり。此の時期の到來を待つ間が、いはゆる忘るゝ計引絞ると云ふ所なり。この時期を待ちて、ヒーフッと射切らば、其の矢は大方百發百中にて、絶えてあだ矢を出さゞる可し。これ即射手の妙境なり。其の時期に達するまでねらひためらふ自重なく、粗忽にも弓絃を放たば、たとひ其の矢は命中すとも、猶まぐれ當りの僥倖に過ぎざる可しと云へり。歌文に從事するものも、此の紛れ當りの僥倖を望む間は、未其の妙境を認め得ざる間なるべし。

縷々數千言、倉皇かき去り書き放ちて、得々然たる當世才子は、共に美文を談ず可き者に非ざるなり。但時事を談じ、世務を論じて、時時刻々に意見を吐露せむとする者の如きは別段なり。これらは、素より其の時機の失趨を恐るゝが爲に、語を撰み文を練るに暇なき事情とあるべしと雖、美文は、さる急激の際にのみ必要ある物にも有らざる可し。

初學の輩など、一首の歌を詠み、一編の文を綴れど、直に是を人にも見せ、世にも示さむとあせる者多かれど、これ必竟、まぐれあたりの僥倖を悦ぶものなり。あてきに驅られて早氣の病魔に身入れられたるにも心付かざる所業のみ。突き止めたる自重心なき間は、大方はかくの如きものなるべし。慎まずんば有る可らざる事なりけり。

されど、かくいへばとて、餘に練り過ぎむも、亦却りて惑に陥入る恐あらむか。第二稿の評論にも云ひし如く、詠歌などには、時と場合との見はからひも有る事なるべし。

八雲御抄に、左の如き御論あり。畏かれども、こゝにかり奉りて、此の評論の足らざる所を補ふべし。

能々思惟す可き事

さうなくよみたるまゝにては、おのづから悔き事も有り。依りて、後悔の病と云ふも、八病の其の一なり。よくよく思惟す可き事なり。但易く詠れむを、すゞろに按ず可きには非らず。それも人の心によるべし。本よりよみたる歌よりはるかにおとりたるも、よみいだしたる折は、良きやうに覺ゆるを、又次日など見るにこそ見ざめすれ。少は

按ず可き事なり。俊頼が抄に曰はく、心とくめぐる人は、中々久しく思へど、わしうよまるゝなり。心おそくよみいだす人は、すみやかによまむとするも叶はず。又必わろき事有り。唯もとの心ざしにしたがひて詠み出す可きなり。といへり。まことに遲く詠れむを、疾くよめと教ふ可きに非らず。たゞ、疾く詠れむをなむ案ぜよとなり。同妙に曰はく、

貫之は、一首を十日廿日に詠みけると云へり。

それも、たとへぞの事にや。貫之毎歌十日廿日によむにはあらじ。たゞ、それも歌を按ずるが能き事を云ふなり。貫之秀詞とて有る歌の、やがてよみたる、集どもにも多し。たゞ道を深くす可きやうを教ふるなり。近くも、保季行能など躰の歌人は、當座も兼日もたゞ同事なり。げにも家に居て、日ぐらし按ずとも、叶はざらむはちからなし。たゞ人に依り、事に依る可き事にて有るか。

嘉應菩提院入道、宇治にて、河水久澄と云ふ事をよませ侍りけるに、皆人歌をおきて、後やゝ久く待ちけれども、清輔一人歌をいださず。座すみていかに如何にと言ひけれども、あまりひさしかりければ……さりとてはとてさうながらとりいだしたりけるに、

幾代になりぬ水のみなかみとはよめるなり。

それも按じわづらへばこそ、ひさしかりけめ。よきほどにていだしたらましかば、何のせむか有らむ。よくよく心得可き事なり。

但かく秀歌にて、おそければこそ遲きといみじきためしには云へ。見苦しき歌ならましかば、何をか詮とせむ。

と宣ひたかせ給へり。此の御論、もとより歌の上のみの事なれども、文章其の他、何事の上にも適用す可き事柄なるべし。

弖爾乎波のとゝのへ、言葉の撰擇などは、研磨して如何やうにも能くせらるべし。敷置の錯誤材料の適否等も、亦鍛錬して上乘となし得らるべし。されど、全體の着想に到りては、たとへ百たびの鍛錬を重ね、千度研磨を加ふと雖、其の効驗甚多からざるべし。かゝる場合には、たゞ改造の一法有るのみ、徒にこの着想不充分なるものを鍛錬研磨して、時日を費す時は、却りて迷霧の中に彷徨す可き嫌有り。これ一概に、鍛錬をのみ事とし難き所以なり。

されど、今やうの人のは、此のたぐひにも非らざるれや。研究錬磨せむ宜しく成りぬ可き事をも、大方にして早く世に出さむと努めたる如き傾有る物、往々目に觸るゝ事あり。一部の著書と云ふ程の物をも、まだ片なりの儘にて出板して、先世上の意向を問はむとするものさへ有り。其の人々の云ふ事を聞けど、往昔の人の著書刪訂に苦心したりしは、出板の容易ならざりしによれり。昔は、一度櫻木に匂はすれど、また改めむ事も容易の業には非らざりき。今の大御代は、活板と云ふ自由なるもの有りて、出版は却りて書寫よりも心易し。良からぬ事あらむ、又幾度にても改む可し。先江湖の意向を卜して、而して江湖の人と共に研究す可し。此の自由なる大御代に生れあひて、不自由なりし時代の著述者噪觚者等の勞を襲はむは、時世を知らざる因循の手段なりと云へり。このたぐひの人々は、著書出版をもて、たのれが學術の練習

場と見做すものなり。著書出版を、おのれが練習場と見做すはよし。されど、其の實は、世人の胸裡を使用して、おのれの練習場と成さむとするものなり。悖徳もまた極れりといふべし。

近世著書の世道人心を紊亂する者多きは、決して偶然の事に非らざるなり。學者と呼ばるゝ人々の著書出板、既にかくの如し。一篇の文をつくり、一首の歌をよみて、かたなりに人の視聽を煩すもの、世間滔々其の風をなすも、亦怪むに足らざるなり。これ等は、皆自己の手腕に覺もなくて、いたづらに世間の毀譽にトし、紛れ中りの僥倖に、一生をたのしまむと爲る、浮薄才子の所業なり。心有らむ者は、能々、此の翁のいましめをこゝろにとゞむ可き事なりけり。

第十三

旅たち侍るを送り賜ふとて、おほなおほな示し賜ひ、御歌もたまひ忝うなむ。程なく立ちかへりてめでたう問はむ。はた、道の行く手によろしき物二箱、はこもおかしうてうじ給ひて賜はせる　御事多からむに、みこゝろざしいと忝うよろこひ侍り。御籠の内にこめて、道すがら御心ざしを思ひ侍る可し。きのふは空あしくてたち侍らず。今霄はいと疾く立いでぬ可く、かくては道もいよゝ平かならむと悦ひ侍りぬ。其の外の事は、得なむまをしまゐらず。

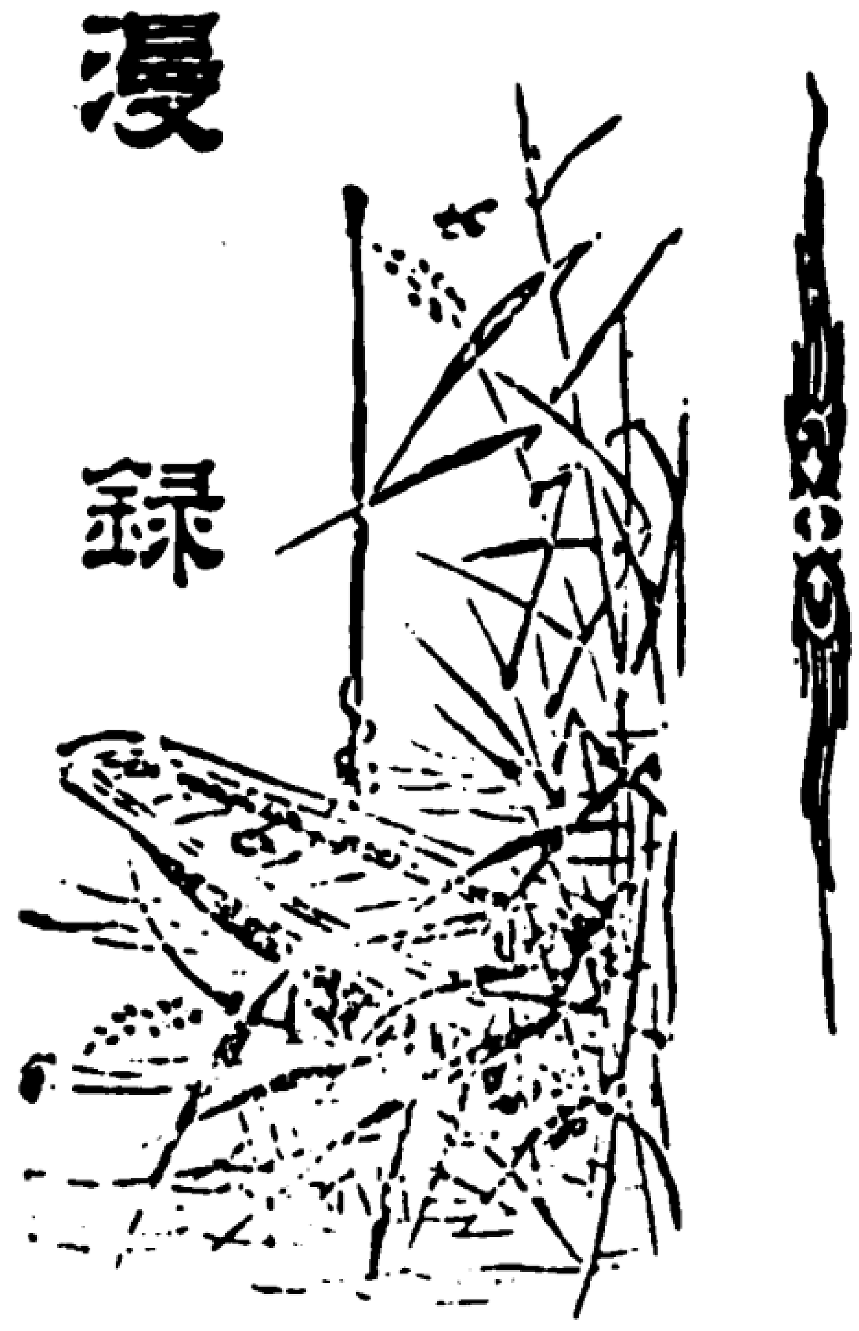
御歌みなこゝに書きつけてもてまゐる。はぞなければ別にかきて見せ給ふに及ひ候はず。

爲子のはしの言葉あしゝ。少しなめげなり。人にはあがめて書き給ふ可きことなり。後のために申し侍り。

。。。。。。又まかるとは、。。。。。。。。。おほやけより下ると、。。。。。。京よりゐ中な

どへ下るを云ふなり。都へまかると云ふ事はなし。みやこへはのぼると云ふなり。外のも直してまゐる。よろづいとみだりかはしくて、かくのみなり。やがてやがて。

漫録



主従心得草（前編之前）

諏訪忠元　寄贈

論語の註に、家を造るには、大ひなるは梁となし。小なるは椽木となしてこそ、明君の下には捨らるゝ者なしといへり。工道にたけたる人は、捨べき材木なきが如し。楠正成が泣男、正雪が物真似の上手、贋筆の名人を抱へしを以てしるべし。

隅田川鏡池傳にいわく、大和の國富田といふ所に、満足（何一つ心にかなはぬ事なきゆへに）長者といふ者あり。先祖より傳へて珍愛する玉の盃あり、今日客の饗應にとて出しける所に、下人あやまりふれてかの盃を打わりけり。客も大いにおどろきぬ。まして其者は、顔色變じ、地に拜伏して主人の命をまち、兎も角もならむやと、死を極めたる覺悟の體、目もあてられぬ有樣也。如何あらんと思ふ處に、かの長者一向いかれる色もなく、物のやぶるゝと云ふも、元より定りたる數あり、僞たくみてせしにもあらず、誤りてせしものなり、何のつみかあらんとて、心よく酒をくみかはし、客をもてなしかへせしを見て、此樣に思へ、このやふにせよ、しかし、常に物を打なくり、麁相なる人は、慈悲の心を以て、可責するこ

ども時によるべし）何某心に思ひけるは、かゝる心ざしある人なればこそ、家富榮へ何一つ意にかなはぬ事なき身とはなれり。夫に引かへ、世人は、彼も又人の子なりといふ事を思はず、已が心に叶はざれば、うちたゝき責いかる、皆是主人の誤りなり。下部は、天性愚にして、主人の心に叶ふ者は稀也。其性、物覺へなく、云付し事もわすれ、或は應對をかろんじ、已がなす處を皆是なりと思ひ、他の者のいふ事を是非なりと思ふが常なり。心得て仕ふべき也。
歌に、

　身の科は思ひもしらず主親を
　　そしる人こそあはれなりけり
　身をかゝるふ心をまめにつとめなば
　　古郷へ歸るにしきなりけり

此心得は、主人達ばかりにあらず、店々の手代も、滿足者の心持ありて、目下の小者を引まはすべし。又人をあなどるは、下部ばかりにあらず、子も親をかろんじていわく、昔の人は愚なりといふ、書經にありゆゐて、見るべし、都て愚なる者は、人をおろかなりと思ふ、聖人君子には少もこれなき心榮也、歌にも、

　氣違やかたはな者を笑ふなよ
　　わらふれろかを人が笑ふぞとあり

是をよく心得給へ、兎角愚人は、人を愚なりと思ふ。若人をおろかなりと思はゞ、此心我も愚人なりとかへり見るべし。楠正成は、家來をしかるに、無禮の惡口雜言をいわさる事、楠公記に見へたり。智者の擧動に心を付べし。京傳の人相鏡にいわく、人に狂言相といふあり、此狂言相に色々有、かなしき相、をかしき相、いかれる相、よろこぶ相あり、赤き筋一

本あるは善人なり、赤き筋幾本もあるは力のつよき忠義の人なり。青き筋ある人は悪人也。見物の目には、筋を見て善悪を知れども、上に立つ君子にはわからぬと見へて、放埒の若殿など、青筋の人に心をゆるして、寳物をひきあげられ、物に賢き大將も、赤筋の人を勘當して、國家をほろぼす段になりて後悔する、此類數多ありといへり。兎角人のくせとして、餘所にはよき人あれども、此方の内にはよき人一人もなし、只埒のあかぬ人ばかり居ると思ふ。是足元に能人ある事をしらず、用ゆることは猶しらず、唯、しかる事斗を知るかなしき事にあらずや。歌に、

家來とて邪見にすれば隨わず
忠義は捨てあたをするなり



浮世いかた舟（續）

作者不詳

ぬす人の事

今はむかし、家中の出頭人の家に、ぬす人いりて、物おほくとりて侍べりしを、おくかたもしらず、中間、小人の中には、尻かげを見たる者も有けれ共、さしいでゝ、かうびんさききられてはあしかりなんと思ひ、たぬきねいりをしてゐたるも有しといふ。とり〳〵評判有、せんさくにをよびしに、ぬす人あらはれて、うちころされぬ。浮世坊聞ていふやう、ぬす人といふ者、あながちに、外より來りて物をとるばかりにはあらず、佛經より見れば、味方がほにして、盗人の引いれをいたすもの、人の身に六人有。まづ目に外のいろをみて欲をおこし、耳に外のこゑを聞て愛をおこし、はなにはにほひをかぎてよしあしを思

ひ、舌におちはひをなめて心をとゞめ、身にふれ心に縁ずる六根のかたちぞ、六境のぬす人をひき入れて、佛法のたから物をうばひとらすると見えたり。世の中の事も、わが氣に入たるをぞ、あしき事をも見ぬかほきかぬふりをしてうちすぎ、主君をへつらひ、御こしをうちぬきて、追從輕薄表裏をことゝし、ゆゑなき知行をとり忠なきれんしやうにあづかり、實義なく欲ふかう、だうよくぶだうのやつばら是有、みなこれ國賊とて、國のぬす人也。それをたま〳〵見しりたる人も、身を大事がれど、見ぬていにてうちすぎ、ましてまなこつらみは見とがめず、さるまゝに人をおしたをさんとのみ心がけけるほどに、天むつわたりて人をもたふし、我もほろぶるやからほし。いにしへもろこしに、三人のぬす人、ある所に忍びいり、よきたから物あまたとり得て山中にこもり、三人して等分にわけてとらんとす、まづ食物をくはずしてはかなふまじとて、その中の一人を市に出して飯をかはせたり。此者いまだかへらぬうちに、二人談合しけるやう、此者かへらば、二人してうちころし、かれがわけくちを、又二人してわけてとるべしと心を合けるに、此者また思ふやう、いかにもして二人をころして、此たからを一人してとらばやと思ひ、飯の中にどくをつゝみて、持て山中にかへりわたへしに、かねて談合したる事なれば、二人の者、一人をとらへて、がんせきそばたちたる谷ぞこへつきをとしければ、うちくだけ死けり。さて二人の者、かのめしをくらひしかば、つゝみたる大どくにあてられ、大ねつきやうらんし、血をはきて死けり。其ごとく輕薄へうりをいたす事、主君の氣にいりて物をもらひ、知行の加増を給はらんと、たがひ

に目がけて我人をそしり、たがひにへつらひうそをつく故に、天むつあたりて、兩方ながく身上をめつぎやくする、かのぬす人のたぐひ也。されど、荀子がいはく、士にものねたむ友あるときは、賢なる友したしまず、君にものねたむ臣あるときは、賢人いたらずといへり。まことの侍は、人のよきをねたまず、人のあしきをむかくしてひろめず、おのれ他人の善惡をかゞみとして、身をつゝしみ、ことむをつつしみて、禮あつく、心だて正直なり。國ををさむる主君は、此人をあげて用ゐるべし、たゞし、此人をしる事、賢なる君にあらずしては、

北の海路

石榑千亦

北の海路は、わが北海道に遊びし道の記なり。それを都なる仝僚の許にいひこしたる消息の體にならひしなり。筆の運のさま／＼なるは、かきし時の仝じからねむなり。見む人その心してよ。

第一信

十月七日午前七時上野發汽車にて、北海道へと心ざす。夜來の雨いまだ全く霽れず、心自らむすぼゝれて、秋のあはれをればゐ候。知らるゝ如く、東北線の風景に乏しさ、見るも聞くも價なしと、はじめより踏れとして、たゞ一室の中にひそみ居り。今日は一人だに仝乘するものなく、中に椅子なり垣なりとして、つくられたる隔の次の室に、わづかに一人の見ゆるのみ。心細さやうにも、心やすきやうにもおもはれ候。風景はすてつ、談らうべき人もなし、さりとて朝より夜にかけての旅に、徒然なぐさむべきものなくては

あらじ。見るものなし、聞くものなし、歎のわきいづことあるべくもあらず。物にふれ、事にあたらず、思のさしれこることはたあるべしや。其心の苦しさは、中々に身をくるしめけむ、古の草枕の方やまさりぬべきと思はれ候。

されど、たゞひとり親しむべき友を携へ候。友とはいかに、柳井絅齋の譯になれる「メリー、ローズの艦長」是なり。よしや、其事柄のあたれりやいなや、文章のよしやあしや、そは二の二なれど、問ふ處にも候はず。

マウリングといふ艦長の必死のはたらきに、身も戰にあるが如き思ひして、軍艦の操縦、砲銃の打かた機關の用法、われ司令の身にてもあるが如く、彼是と思ひなやみ候。何よりも面白く壯なりと思ひたるは、この人の戰況を新聞に出しつること、身を軍籍にれくもの丶わざにあらずと、直にすてられつるにも拘はらず、捕拿私船にあつべき新造船を買求め、兵員をと丶のへて、戰地にのぞみつる事に候。分捕や、戰鬪や、負傷や、激擊や、あらゆる名譽を荷ないつると同時に、いみじき負傷をも負ひて、人事をわきまへぬほどに、現職に復り、少佐となり、大佐となり、權男爵を授けられつることを、病やゝれこたりて聞ゑし折の心、いかばかりなりけむとれしはかりて、感慨いたし候。たゞし、少女のつきまとへるは、小說としてせむなき事とはいへ、さも作物らしくなりて、見ぜねなきかと思はれ候ふは、例の僻心にや候はん。とまれ角まれ、世の眠をさますにはか丶るものこそいとうれしうて。

この艦長によりて、今日はいと安らかにれもしろう暮し候。もしこの艦長なかりせば、わが身の今日は

いかなりけむ、もし未來英國に、かゝる艦長なからむには、英國の前途いかならむなど、よしなしごと思ふも、面白き限に候。

こよひは、仙臺なる針久にやどり候。こゝは度々やどれる事とて、我家も全じやうにおもはれて、心やすく候ひき。

汽車は、時間の正しきをもて、信をおけり。時間正しからざれど、汽船にも劣り、和船にもおたることを得ぬかと思はれ候。そは早さをもて、第一位におかれたるものなれど。もし速やかならずども、蒸氣の力を借るにも足らじ。されど、私立會社には、まゝこの弊あり。日本鐵道は、大かた政府のひとしなみにて、あるが中に、信をおかれたる一つに候。さるを、今日この頃は、その私立の本性を、あらはし申候。線に何かいはれのある事なれど、ともかくも、線には、何のさはりもなくして、たゞ待合はすに、時を費し候。わがのりし列車も、こゝまでに、三時間どかりおくれ候。昨日午后三時の直行は、けさ三時に來べき定めなるを、七時になれど、いまだ着かず、馬鹿々々しき限に候。十月八日仙臺において

才くらべ（十三）

蓬生屋女史

塵塚の松

俗に三角の切見世と云ひて、芝區三田同朋町の、きたなき長屋女郎をなす阿松と呼ぶあり。その住みける家の側には、塵塚のあるを以て、人、字して、塵塚の松と呼びけるとぞ。されど、其の心は、其の名に負ひてかさむかりけがれず、あだ／＼しからず、容色もいとうるはしう、奇才ありて、しかも和歌を好

み、衣裳なども風流をもとめて、あだ〳〵しきを欲せず、同じ川竹のながれを汲みながらも、他のもの丶ごとく、色を賣りて出身せむなどの懸念は更になく、たいうるはしき和歌の道もて、洒落を盡くすものから、まためづらしう思ひてよろこぶ人多かりけり。ある時、



いと尊大げなる武士來りて、松に向ひ、汝は腰折をつかふまつるとな。一首つかうて、己れにあたへよと云ひけるに、阿松はほ笑み、誠に七十路むかゝりの腰折にて侍れど、題を給はらむ詠み侍らむと云ひけるに、そちが名は塵塚の松と呼ぶよし、そを題にしてつかふまつ

れとあるに、阿松とりあへず、

ちりづかのちりにまじはる松虫の
聲はすゞしきものとしらずや

とよみたりしに、武士は流石に耻たるさまして、物を云はず去りしとなり。

笑話（奇談一笑）

かゝみ

談義坊

京都にては、春二三月のころより、はじめて秋八九月のころに至るまでがほどに、いろ〳〵の小さき鮮魚を生ながら販りわりきて、家業をするもの數多あり。この生きたる小鮮をば盆庭の池にはなちて翫とするなり。都てこをよびて談義坊とぞいふなる。さてかく名を談義坊〳〵とよびなしながら、其の名の如何なるよしによりてか、かくいふらんとは、誠によく知れるものもなし。ある人いはく、俗語にて、人に經を說き聞かする和尙を、だんぎぼうといへるよりこの名はおこれり。さるは　この和尙つねに地獄天堂の事をのみ說けども、口にはいひながら、またおのれに見ぬところの事なれどいふなり。俗語にて話すと放すとことぞ通ひ、見ずと水と通へり。和尙見ずに話すが故に、この小鮮を水に放すと語同じければ、その義をとりて、しかいひて謎語とせるなりといへり。又ある人はいふ。この魚二三月の暖かなる折をまち得て、池の中に出るより、これを暖氣魚といひしが、後轉訛りて、談義坊といへるなりともいへり。何れまことなるらんはしるべくもあらず。

阿壁

雪花菜を口に含みて、咽喉に下さんとすれば、とは

りかねて多くはそのなからに塞がれて支かふなり。さてかく咽喉に窄れは、物もえいはす、眼をみはりつゝ、壁をみつめて、その腹に下り果つるを俟つなる。其の状、達磨の面壁のさまに似たれは、俗に之を壁睨といふ。今京都のをみなこともの、みな豆腐をよひて阿壁といふはこれよりれてこれるなり。

須磨の月（十）

白魚女史

須磨とは聞けど中〳〵に姫が心はすまず、親の心、乳母がはて、如何とばかり思ひまどへど、中〳〵にとひ慰むる人の情に答ふる言の葉はなくて、たゞ涙のみ夕しほのみなぎりかへり、しぼりても〳〵、またぬるゝ袖のしづく、如何にかづきする海士の衣とて、かくばかりはぬれざるに、心なき海士たちも、たゝわかぬ涙にむせびかへりけり。

かくする程に、此家の主人もかへり來りて、とかくに身の上をとひすがるに、姫はつゝむよしなく、かつ〳〵事の本末語れど、あるじもそゞろにぬれまどひて、さては、さやうのうき事に此處にはさすらひ給へるか、いたはしさよ。此處ら見るかげもなきとまやにはあれど、海士がかるもの亂れあるのみ、他にうき事も候はねど、ゆゝしうは候へど、心安堵てすみ給へ、其の内にはまたふきかへすべき風も候はんなど、嫗も共に慰め聞ゆるに、二人はいよ〳〵ぬれまどひて、身のおき所もなげなり。

姫はとかくに乳母のはて、聞かまほしうするに、例の船子檝内もあはれに思ひて、事のついでに彼方に亘り、様子さぐれど、定かには知れざれど、宮女の一人切られたるよしを云ふに、姫は聞きて、いよ〳〵

すまぬ思ひに、なきあかしけるが、今はせんすべなく、たゞ惜しみくれたる玉の緒をつなぐをせめて、亡き人のとぶらひと思ひ給へなど人々にも慰めなだめられ、己れもやゝ思ひさとり、日数ふるまゝに涙のかれしかど、されど浦の千鳥のなく夜な〳〵、二人袖をしぼらぬはなかりけり。

あはれ、高きもの必ずしも尊からず、ひくきもの必ずしも賤しからず。げに、牟禮兵衛を初め、啞僕と云ひ、此處に船子と云ひ、海士の長者と云ひ、たゞ情深く、姫をいたはりなぐさめ、大領の姫上とて、累代の主君の如くに塵をもすゑじといつきかしづかるゝ、人々の情の、姫はいとゞ身にしみて、つく〴〵と思ふほどに、年さへあらたまりて、姫が涙のつららもとけんとする春となり、浦ふく風もいとあたゝかきに、姫もかくてのみあらんよりは、せめて汐だもくみて、長者が情の萬分一むくいまほしと云ふに、海士はおどろき、あるまじき事とてとりもあげぬを、さりては心ぐるし、中〳〵に妾がなぐさみ、もとよりはか〴〵しうは汲めまじけれど、ほんの海士少女がまねびかりをと強ひて頼むに、海士もとゞめんやうなく、さらばとて汐の桶新に、小さく、うつくしくつくらせ、衣もあやのもの仕立て、誠の慰にし給へと、萬づ他に異にとりもちぬるに、姫はいよ〳〵ありがたき人の情にぬれまどひ、それより姉妹して沖に出で、海士少女にまじりて汲むまも、媼みづからつきそひて、淺き方へと導くに、さらでも容良けだかき姫が、衣も桶も異にしたて、所に名立る媼さへつきそひ、萬づ貴くかしづくに、人もおのづから、ゆづりかしづきぬるに、いづれも〳〵、深きなさけの露、くめどくむまゝに、姫は身にあまりて、わび



しきぞかりなり。云はねど人もゆづりかしづくに、媼も安心して、二人のみ出さんもまた慰むる道にもなど思ひ、たゞよくあやふからぬやう、姫にくれ〴〵聞えて出しぬる折り〳〵もありけるが、或夕ぐれ、おぼろ月花やかに、二人が歸らんとする汐くむ桶にうつりけるに、そゞろにむかしの忍ばれて、涙つく〴〵ながめぬる折りから、笛の音あはれに、春おもしろきふしの松風に通ひたるに、二人は何故にか身をふるはし、急ぎ我が家へ歸らんとする折りしも、あらはれ來りし男二人三人、やにはに姫をひきかゝへ、聲をも立させず走りて、彼方の一艘招ぎよすれど、中には、笛吹きの彼の岩作、見るより笑みをつくろひ、直ちに船に押しうつして、姫よ、さぞかりは尋ねまどひぬ。何とてはかうやうなる浦に忍ばせ給ふ。母御もいたうわづらはせ給ひぬ。父御には我がよきやうにとりもち奉らんに、曲心はやめ給ひて、いざ共に歸らせ給へ、よき婿まゐり候はんに、いざ姫、さるにても憎き乳母、大事の姫に曲心を敎へ、かやうの浦に誘ひ出し、かゝる見るめなきわざをとらするくやしさ、のう姫、君がかくれられてよりの岩作があけくれの思ひ、如何にくだけしとは思しめす。岩作が尋ねまどはずば、いたづらに淺ましき海士の子となしはてんを、賴みをかけし神がめぐみに、うれしき逢瀬とて、いつはりの涙たゞへて、よりすがらんとするに、姫はたゞ恐ろしう、鰐に捕らはれし心地して、泣きまどへど、何とてはさやうにむづがるゝぞ。岩作が情の身にしみてさはぬれ給ふか、姫、姫よ、げに今日迄の心づくし思ひくみ給ひての涙ならん。のうあはれとおぼして此報ひ、必ずなし給ひてよ、姫とて

やさしげに背を撫づれど、姫はいむらにさゝる、思ひ、いたく覺ねて、少しく身をづらせて、さやうにはづかしうし給はでも此處には人も居らぬにとて、なほより起さんとす。姫はあさましう船底に身を沈ますを、彼方は沖のなどろに船をうかべ、我はもややすみ子ねたりと空高くうそぶき、かくよりあふからは神のむすびせたまへるねにし、月も媒し玉へとて、はてはかき抱くに、姫はあさましう、泣きと泣く聲、浪にひゞきてあはれなり。折りしも行平卿罪ありて此浦にたゞよひ玉へるが、今宵同じく船を浮べ、はるかに姫がなく音を聞て、あやしう思はれ漕ぎよせて仔細とへど、岩作はたゞ妹と月にむせぶなりと答ふれど、如何にも姫が泣くさまのたゞならぬに、なほいぶかしみ重ねてとはんとする折りふし、姫は之までとて、水底にとび入るに妹もたくれずれどり入りぬ。あはやとあきるゝ岩作、せんすべ浪をうち守るほどに、行平卿もおどろかれ、あわてゝ船子に引き上げさする折りしも、一陣の風さつと吹き起りて、岩作が船をつき上げまき沈め、はては急流に押しながして行方も知らずなりたり。行平卿はたやすく姫を救ひ上げさせて、早く岸に漕ぎよせさせ、さま〴〵いたはりて、事のもと尋ぬれど、言は云はず、たゞ泣く折りから、二三艘の船、船つゞみをうちならし姫よく〳〵と呼び立てゝ來りたり。之ぞ長者の家より、姫が歸りのおそきを案じて出でたる船にて、早く、姫を見つけ、つゝがなかりしをよろこび、行平卿諸共に家に具し、ありし事を尋ねなどして、いたくもてなしけるに、行平卿も、二人か容姿のたゞならぬげなるに、その身のもとを尋ねしかど、二人は、身の上を明かさんともせず、長者に請ひ、料紙

をもとめ、

しら浪のよするなぎさの世をすぐす
　海士の子なれど宿もさだめず

と一首の歌をかきつけて見せける水ぐきの色もあはれに身にしみて覺えけるが、やがて長者に請ひて、己が館にむかへとり、あつき情をかけけるが、行平卿罪ゆりて都に歸らるゝ折りも、いたく別を悲みけるが、後、姉妹は行平卿が住みてし家のほとりに庵して尼となりしとなり。　(完)



文林

氷　　徳大寺實則

板ひさしけさ霜おろし手にむすふ
　たらひの水もこほりそめつゝ

爐邊歲暮　　佐々木高行

埋火をかきたてしつゝいまさらに
　をしむかひなきとしの暮かな

谷氷　　久我建通

谷川にかけしくるまもけさよりは
　うすつきやめて氷ゐにけり

池水鳥　　鍋島直大

我宿のいけにことしもれりたちて
　のどかに遊ふをしの一つれ

嶺上松　　津輕承昭

山かつの斧にももれてたかねなる
　まつは千代とも限らさらまし

曉落葉　　諏訪忠元

ありあけの月影殘るまとの戸を

たゝく木の葉の音もさむけし

井氷　長谷信成

汲にくるひとかけたゑてあつ氷
あらしのむすふ山の井のみつ

水邊冬月　宮地嚴夫

霜さゆるみきはの鴨のかす見ゑて
みにしみわたるふゆの夜の月

樹間冬月　北郷久政

木枯のふきあらしたるわかやまの
このまの月のかけのさむけさ

竹霰　千葉胤明

たまあられたまとくたけて呉竹の
世のつねならぬ音そのこれる

澤氷　遠山英一

水あみし小鳥のかけもたゑはてゝ
のさはの岸はつゝらゐにけり

竹上霰　三輪義方

風をあらみなびきさだめぬ竹のはを
うはむしりしてちるあられ哉

聞落葉　三浦千春

手まくらのすきまの風に夢さめて
聞けは木の葉の散る夜なり鳧

野中婉女　佐々豊水

ひもかがみ野中にたかきひとつ松
みどりの色そあふかれにける

野分せしあした　下田義天類

うらみてもかひこそなけれ眞葛原
ありしにかへす風もふかねは

手兒奈の傳を讀みて　菊池眞澄

くみ見つゝ水も昔のまゝの井の

清きこゝろの手兒奈れもはゆ

津の國なる中山寺は地位高くして大坂神戸の登畑を遥かに見下すところなれむものして　草野隆道

後の世を頼まぬわれもきて見るは
なかやま寺のけしきなりけり

除夜鐘　足立正枝

山かせにふきさそはるゝ鐘の音の
きゆるや年のをはりなるらん

四海清　宇井正夫

久かたの天津ひつきのかゝやきて
いとあきらけき御世ろたふとき

山家　伊藤純三

やまさとはうきよのことも白雲の
しらて月日やのとけかるらん

月夜聞琴　伊東祐賢

月かけにこゝろつくしの琴の音は
なほ忍はるゝむかしなりけり

軍學に志すといふ人のもとへ　木庭芳香

浪の上にたゝよはすして葦はらの
國のかためはこれやこのみち

海眺望　近衛貞子

網ひきすと群ゐるあまかにきはひは
からき世渡るわさともなし

遠山初雪　鍋島榮子

吹かせのにはかに寒きこのあさけ
ちゝふね白くみゆるゆきかな

翠松　前田朗子

あらしにも雪にも堪てをかのへの

松のみどりはかはらざりけり

社頭冬月　柳原愛子

稲荷やますきの葉しろく霜みえて
てるかけすこし冬の夜のつき

森時雨　小池道子

打わたすもりの時雨やかゝるらん
かへりし鳥のたちさわく見ゆ

秋霜　諏訪晴子

くれてゆく秋も末野のくさの上に
今朝はつ霜そおきわたしける

冬灯　松平健子

さゝの葉のさやく霜夜はともし火の
またゝく影もさむけかりけり

寒夜衾　保科節子

年と共にかつくふすまを重ねつゝ
老をおほゆるふゆの夜半かな

初雪　日野西廣子

村すゝめなく聲さむきたけの葉の
さやくと見れははつ雪のふる

山落葉　原田蒼生子

わかの水くまんとすれは山の井は
散もみちはにうつもれにけり

夜霰　小川直子

宵のまは月のさしたるねやの戸に
ふけてあられの音しきるなり

水邊落葉　安東菊子

さそひにしかせにわかれて山川に
ひとり流るゝみねのもみちは

十一月三十日霰ふること幾そ度なるかを知らす　師岡須賀子

雨まじりあられふるなりいく度か
　板屋ののきもくたくむかりに
　あくる日つとめて見れは雪となりぬ

仝

うべしこそさゑわたりけれ今朝みれむ
　夜半のあられは雪となりぬる

みこし路のこしの初雪はやふりぬ
　紅葉ちりにしにはもはたらに

みやこびと菊やめづらん三越路は
　あられに雪にふりかはりつゝ

みこし路は初雪しろしふゆふかく
　つもらんほとを思ひこそやれ

孝のことは　福羽美靜

人たるものは、みな、その身のもとを思ふべきこととなり。これ、父母をれもんし、父母の心を心として、その人たるの道をつとむるにあり。まづ父母たるものは、その子のさかゑゆくことをのぞみ、そのさかゑもまた、衆人にこゑて、世の人にはめられ、かつ世をして、その徳を蒙らしむるを、もつともこひねかふことなりかし。それまでの望に應ずること、かたきことなりとも、せめて身を全くし、行ひをやまることなく、父母をして、よろこむしむるの勉めを怠らずして、身に應ずるの業をはげみ、父母の老をやしなひ、子たるのみちをつくすべし、これすなはち、孝のみちといふ。

　つくすべきしなはさま〳〵されとみな
　れやのこゝろをやしなふそ道

吉崎紀行　在福井　師岡須賀子

降りしきりし時雨の雨晴れて、空のけしき定まりぬ。山里の菊紅葉いかならんと思ふ折から、この月十六

日、坂井郡吉崎村へと人々とうちつれて出立つ。この事はやくよりさだまりつるなれど、雨のためにのび〳〵てありしなれど、誰も〳〵、いと嬉しげにて、明日といふをさへ待ちわび顔なり。宵の程より何くれと用意しつゝ、今夜はいとゞ長しとかこつらんかし。一番汽車にて出立たん定なれど、未だ暗き曉より起き出でゝ、妻戸あけて見れど、有明の月さやかにて、空いとはれたり。うれしきにつけて、人々の上の樂さのほども、先づ思ひやられぬ。五時半ばかりに校を出でゝ、福井停車場にいたり、六時發の下り列車に乘らんとす。有明の月かげ漸く薄れ行き、横雲の分るとともに、ほがら〳〵と明けゆく空いとおもしろし。百五十名あまりの生徒、各主任の人々にみちびかれて、乘れる車三輌にみち〳〵たり。各のゑみかたまける面持、平生に似るものもなきは、喜ばしさの堪へがたきなむめりかし。車は動きそめぬ。空はやう〳〵明けゆきぬ。程もなく、春の頃に見つる平岡山、丸山など過ぎて、廣き田面に出でぬ。遠近の中稻晩稻の刈りはせるか數多見ゆるに、農業の艱苦はしられぬ。はた、柿の實、藍の花の紅なる、蕎麥の花、くさ綿の白き、さるは又山々の紅葉、雛のしら菊、いつれか秋のあはれはあさかるべき。各がし、或は語り、あるはうたひつして樂しけなり。この市に、名だかき西別院は、何處までも〳〵見ゆなど、いふ内に、いと大なる川あり。九頭龍川といふ。こは昔、この國におはしまし　繼體天皇の堀らせたまひし越前三大河の其の一なり。この川、一昨年も昨年も今年も隄防溢れて、全市數郡を浸せしなりと思へど、いと物凄じうなむ。かしこに森田の橋見ゆ。何時の日、誰と共に渡りぬ、何の折に、など云

ふは、此の近傍より出てしものなめり。かくて、汽車新庄をへて金津にとまる。蘆原の温泉に行かんには、此處にて下るなりとなり。空は全く明けはなれて、東の山の端いと赤う、朝日影のさし出たるさま、めでたしとも愛たしや。かの宮中の御題にて、御勅撰となりし何某の孃の（東の山の端赤くなりにけり天つ日影や今登るらし）と云ふ歌だも思ひ出らる。各もこを見賞でゝ「豐さかのぼると」唱歌するあり、あれよ〳〵と見る間にのぼる木の間のかげいと面白し〳〵など、今日計は師の側をも憚らず恐れずて、打興ずるさまいと娯しげにて、打見るたのれ等さへ、いとうれしく樂しかりけり。此のあたり、東も西も皆松林のみにて、山と山との峽を分け行く如きところ多し。

　小松原つはら〳〵に朝日子の
　　さし出る影を千代も見てしが

と口すさめど、側にありし年若きが

　色かへぬ松のみどりに朝日かけ
　　にほふをみればいとゝめでたき

これにても歌といふものになりぬやとゝふ。歌のよしあしはとまれ、かくまれ霜にも雪にも色かへぬ操こそは、各のむねとならひつべきものにやなどいふほどに、又しも汽車はとまりぬ。この度は細呂木といふ一同こゝにて車より下りぬ。時に午前六時四十七分なりき。各親しき友達打つれて、樂しげにあゆみ行きぬ。たのれは躰よわく、足捗らねど後殿となる。日影はやう〳〵さしのぼりて、松のみどり紅葉の色、いとゞ光を添へて愛度ともめてたしや。されど、風いと寒く、衣手うすきをればゆるむかりなるぞ少しわびしきや。されど、歩むにつけて、身内温

くなりて、つひには暑くさへなりぬ。運動の効は著しきものなりと云へど、一人は、されどこそは今日かくは來つるなれ。百藥の長を酒といふ事あれど、其はあらず、運動ぞ藥にまさる藥なるとて、いと得意なるもことわりなりけり。さるは、路の兩側にかけ渡せる刈穗の稻は、屛風の如く、草綿の實の白う廣がりたるは、身につけねどまづ暖げなり。蕎麥の實のかどあるも、今日はかど〳〵しからで、藍の花の紅なるは、赤き心もて我等をむかふるならんなど、打興じつゝあるに、都の市中にのみなれこし身には、いよ〳〵めづらかにておもしろかりけり。

未だいと早くて、畑のみなる田舍道なれど、人も通はず、遙に先立ちて行く女生たちの、右に左に折れ曲りて行くさま、或は赤き、或は靑き、さま〳〵の衣の色々の美しくて、立田姫の錦のとぞりにも劣りやはすると見るに彼方より菅笠をもち手拭を冠りなどせる五六人の賤が女の來るあり。農夫の妻、又は娘などにもやあらんと思ふに、近づく程、先立ちて行く人も笑ひ、そのものどもゝいと大聲にてさもをかしげに笑ひつゝ、口ひゝらかし居たり。何ぞと友にとへど、先き立てる人々の中に、束髪といふものに結ひたるが、其のさまの見なれねど、異樣なりとて、笑ふなりとぞ。此處は坂井郡とて、越前の最北端にて、常に見馴るゝものは、農夫漁人のみなれど、今日の一群を見て、感せしにやあらん。おのれらも、亦このさまを見て、さま〳〵の感をおこしつ。こゝらの道、前の月までは、度々の洪水にて、いと惡しかりけれど、腕車など、かけても立つべき樣なかりき。然るからに、本願寺法主が、吉崎參詣の折、加賀まで行き、大聖寺の停車場より下りんとせられた

るに、此處の村長はじめ、一同細呂木よりしたまふか順路なり、はた、吉崎山は我が村の內なり。さるを、道惡しとて行き過ぎらるゝ事もありなど、我村の恥辱なりとて、奮ひ立ちて晝夜を分たず、競ひて修理しけるなりとぞ。されど、路もいとよく、馴れぬ山路もさどかりは苦しからず。何事もこの村の人々の心用ひは有りたき事にこそ。かくて、人家ある方に至れど、左よりも右よりも出でゝ、誰も見よ、彼も來よとて、いと〳〵珍らしげなるさまなり、かくて、橋見えぬ。下は小川なり、いと清々として、岸の紅葉、柿の實など、影もさながら底にも生ひたらん心地する計りなり。今は先立ちて行く人々の影は見えずなりぬ。何處をか分け入るらん。此處までは一里余りなれど、おのれら足弱きものとも、つかれはてゝ進むべき勇氣なく、暫し橋の上に息ひ居たりしに、さらば此處より舟にて渡らん、いかに〳〵と幹事のとふに、誰も〳〵口にこそ出さね、力なきさまなりければ、殿のものども、皆々嬉しげにていそぎ乗りつ。小舟一ッに九人乗りたり。梶取が棹さして漕ぎ出づるさまの寛かなる、芝浦わたり見なれし身にはいといとめづらし、兩側には蘆生ひ茂れり。打靡く蘆の葉分けつゝ、狹き入江漕ぎめぐるに、さやさやと音するがいとをかしくて、

かの港入ならねど
おなし方に漕ぎかへるへき障りなし
　蘆分小舟おもしろくして

と口すさめど全船せる友のなど珍しからぬと笑ふ、

又

細呂木のあしかき分けてこの小舟
　はや北潟に乗りいてにけり

北潟とは、こゝの湖の名なり。こを聞きていよゝ歌の様にもあらずと笑ふ、かの舟君のよしと思ひて詠まれたる歌をさへ誣ひきと聞くを、ましてかゝる調はす風韻なきは笑はるゝだにいと嬉し、いざゝらば今一ッ笑はせましとて、

陸路行く人ものせましはる〳〵と
　みるめつきせぬ北かたの湖

といふほど雨こぼれ來ぬ。急ぎ傘など開くもあり。濡さて渡らんとてもどくもあり。このあたり皆松のみ生ひ茂れり。茸狩せばいかにをかしからましなどいひしらふ一人の友、

いつ方の松の木末やさそひけん
　雨こぼれ來ぬ北潟のうみ

とうたふ。湖はさばかり大からねど、景色いとよく、水の面は鏡の如く、折々音つるゝ時雨も、處がら面白し。岸につきぬ。こゝより二町ばかり左の方にて、吉崎別院にいたる。

こゝは山に沿ひて建てられたり。東西兩別院、功徳藏、鐘樓、方丈、食庫、庫裏、いと莊嚴なり。先に陸路より來し人にも此所にて一つになりて、共に本堂に入りて禮拜す。名たかき蓮如上人の開かれし靈場とて、此國唯一の宏壯なれど、隨喜渇仰の涙にむせふものも少なるからず。かくて、後の山なる御花松とて、上人の娘の供へられし松、おのづから根を生して、大木となりたるが、三本あるに、今は枯れ朽ちて、幹のみ殘れるがあり。又願慶寺とて、傍の寺院に鬼の面ありとて見に行くあり。よく聞けば肉付の面なりといふ、肉付の面といふこと、諸所にあり。敢て珍らしからねど、共に行きて住僧乞ひ見る。法衣改め、珠數につまぐりて說き出でつ

るは、今は四百五十年の昔文明五年の頃、越前國坂井郡十樂村に、與三次と謂ふ農夫ありけり。もとは仝郡日山の城主吉田源之進といふものに仕へしと云ふ。其の妻に清といふあり。孝貞のほまれあるものなりけり。この頃、蓮如師吉崎に敎化せらると聞きて、夜に暇を見ては、こを聽聞に行きたり、さるを、この姑、いと頑しきものにて、この嫁を嫌ひ、その吉崎詣を止めさせんとて、或る夜家に傳はれる能の面をとり出し、これを被て、嫁の往來する道の傍にかくれて、歸り來んを、今や晩しとまち居たり。

きよは、斯くとは夢にも知らず、急ぎ歸らんとする道のかたへより、ふと現はれ出たる者あり、眼のみかゞやきて、いと黒く恐ろしき面したるものなれど一度は太く驚きしも、年頃安心立命の功むなしからで、靜に立とまり「食まば食め喰はゞくらへ金剛の他力の信はよもや食むまじ」と口すさみて行き過ぎんとするに、怪しや其のもの苦しげに、免るせ〳〵と云ふ、其の聲に覺えあれど、立もどりすかし見れど、こは如何に我が姑なりけり。驚き急ぎて、其の面をとらんとするに、え取れず、如何にすれどもせんすべもなし。

きよ姑に勸めて六字を唱へしむれど、不思議や、この面安々とゝれたり。されど姑の顔の肉面に付きて離れざりけれど、姑も甚く耻ぢおそれて、我非を悔い、且は諸人の戒にもとて、當寺に納めたりしなりと云ふ、筐の内より出すを見れど、まこと物古りたり。春日の作にて、能の武惡に用ゆる面なりけり。嫁おどし肉つきの面とて名に高きは此れなりとて、為たり顔なるも殊更めきたりや。

これより晝食など終へて、濱坂の浦鹽屋の灣など見行く人々もおりたれど、おのれは行かざりき。幾度か時雨しくれて、衣もしとゝに濡れて歸り來るぞ、いと〳〵心苦しきや。おのれも、わたり見わりしに、前は即ち鹽屋の灣ならん、浪いと荒く、松原かくれにもいとすごし、石階を下れば、町なり、大方は旅店にて、こゝに參づる人々を宿す處なるべし。左は吉崎、右ははや加賀國にて、大聖寺なりけり。その内に、酒賣る店あり。伴ひ來し女生のまだ幼きが、その店を見て、いと〳〵不審しき面色したり。いかに、何せしかと問へば、彼の黑く丸きものは何ならん、何のしるしならんなどいふ。見れば家の軒に杉を丸くしたるを出せるなり。何時の代よりかくせるならん、いと煤げ古びたりと云へば、友の流石に神代のものにしも有らざらんとて笑ふ。こは酒賣る店の招牌なり。大和の國の三輪の里わたりは、斯くしてしるしとせるなりと云へば、さらば神代の昔、高神靈の神の御女の御許へ來給ひたりしといふ。大物主の神の鎭坐ます三輪にやなど言ひ出づ、めづらしき處にて、歷史の復習よとてわらふもおもしろし。この國わたりにて見る事はめづらしきなり。昨年の春にやありけん、東京にありし時、或る殿の園遊會の折、和洋の品々取集めたる處の印に、大きなる杉の丸つくらせて、傍に『とぶらひ來ませ三輪の山本』と記るされたる事など思ひ出られて、珍らしくもをかしくも、またなつかしくもさま〴〵に思ひやられぬ。折々聞こゆる機織の音、また珍らし。彼の加賀絹といふものゝ出づるところなりといふ。

かくて時移りぬ。歸路の用意すべしとて、打そろひて立ち出づ。此度は悉く舟に乘らんとて、先につき

たりし岸べにやどる。舟六艘をしたてたり。岸べ離るゝ程、空は晴れわたりぬ。日かげのどかにさしていと心地よし。此度は何れの舟もみち／＼て、賑々しくやう／＼中流に漕ぎ出づるほど、折にあひたる唱歌ども彼方に此方にうたひあふ。いと樂しげなり。前にのらざりし友の一人

　　かくはかりたのしきものとしらざりき
　　　山路わけつゝ今朝は來つれど

といふに、

　　おもふどち水のまに／＼棹さして
　　　心さへ行くこの船路かな

また、こゝのさま松島の如しとて、その唱歌どもするものありけれど、

　松島の浦こぎ渡る心地して
　　千歳にあかぬ舟あそびかな

と云ふほど、或はおくれ、或はさきたつ。各舵取を急がせて、競ひ顔なり。そのさまいとをかし、わが船も負けじおくれじといさみ立つに、負けじ魂の女子

　　こげやこげ進めや／＼これもまた
　　　おくれてのみやたゞにあるべき

いざとく／＼とそゝのかすに、年長けたる一人の友は、

　　なか／＼におそきもよしやかくはかり
　　　たのしき船路また有めやは

とていと落居るも亦をかし、

　立かへりまたも渡らん北潟や
　　今日の舟路のあくよなければ

とひとりごつほどに、今朝の橋の本につきぬ。此處より又もとの畑道つたはりて行く。時雨又々ふり來ぬ。山々の紅葉、籬の菊ぬれて、いよ／＼雨まされ

り。午後四時四十七分、細呂木發の四番列車に乘りつ。

見るが中に細呂木金津打すぎて
　　はや故郷の福井にぞつく

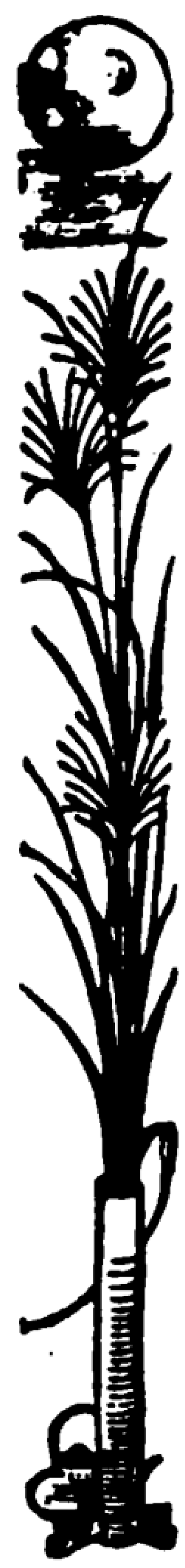
とて皆々よろこぶ。停車場を出てゝ、各そこより家路に歸る。此處も又雨ふる。

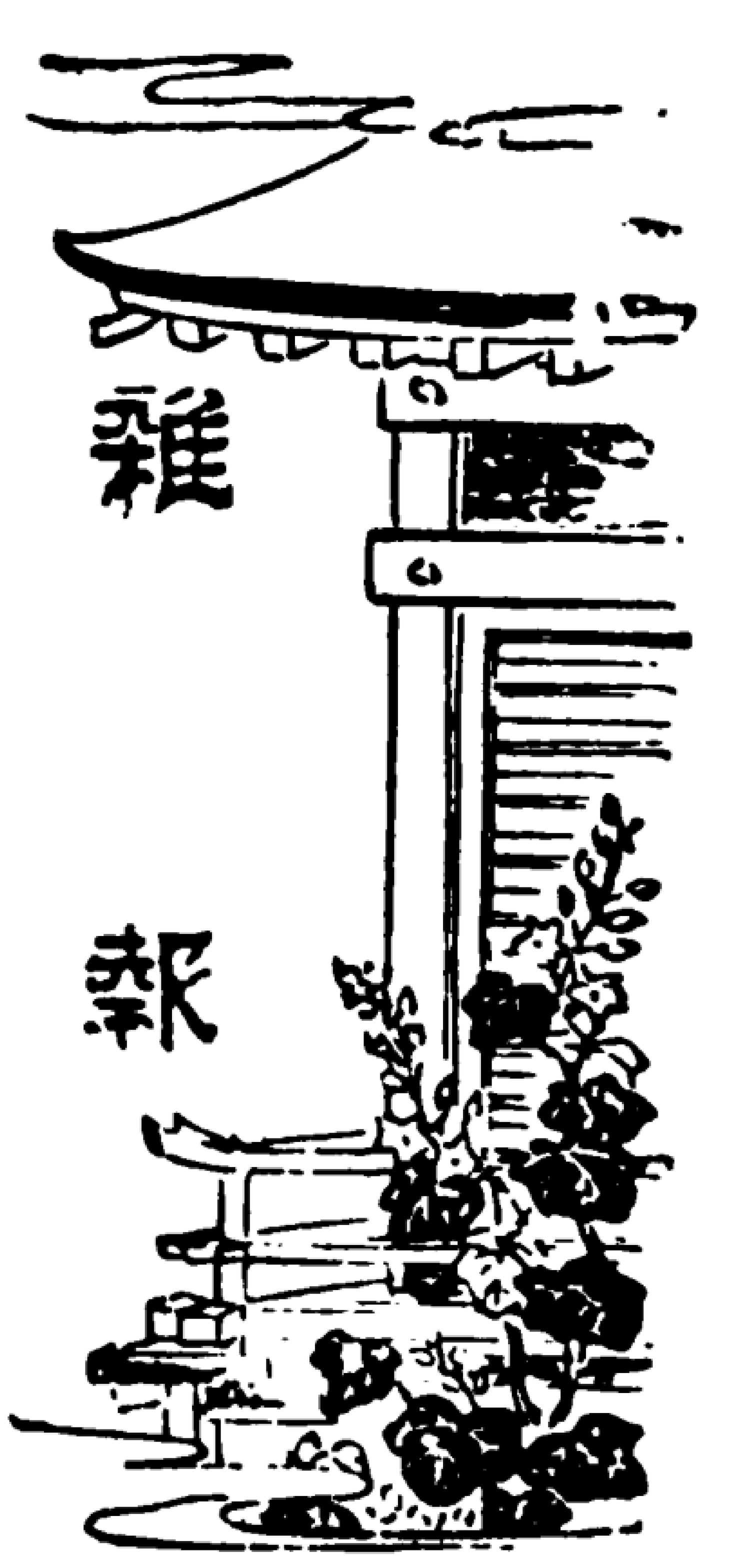
こゝも又時雨ふるなり細呂木の
　　雨や車にのりてきつらん

なはいと多かれど、さのみはとてなむ。

明治三十年十一月十六日の夜、時雨なほ打そゝぐ窓のもとにて

すか子





●英照皇太后御一週年祭　は、來ん一月十日より十一日にかけて、青山御所と、京都泉山御陵とにて、行はせらるべし。大喪使ははやく廢せられたれど、この委員には、宮内省の高等官に、長には土方宮内大臣に仰せつけらるべしときく。さて又京都幸啓の御事は、未御治定あらせられざれども、多分御代拜にてゝせさせ給ふべく、小松の宮殿下同宮妃殿下仰せ付らるべきか、行幸啓あらせらるれは、近衞師團の將校、供奉仰せ付けらるべく、もし御代拜ならば、大津聯隊より儀仗兵二大隊をつけらるべし。さて議會開會中なれは、御祭式には、大臣の中にて、公務

にさはりなきもの一兩名、京都に赴くべしときく。

●女子高等師範學校長高嶺氏の女子教育談なりと云を聞くに、

○女子教育も、二十年來一時の潮流に乘じて、除り勃興し過ぎたるやの感あり。其反動として、稍衰退したるが如しと雖も、諸般の事物と共に、多少の進歩を爲したるや明かなり。唯、戰後諸般膨脹と共に、女子教の進行せざるは事實なり。

○男子の教育も、固より容易の事にあらずと雖も、女子教育は、其影響する所家庭の微細なる所迄及ぶが故に、最も困難の事業にして、また最も大切なる事なり。

○教育は其父母に代りて兒童の教育を爲すものなれど、父母の其子に於けるが如く、慈悲仁愛の心を以て生徒に接せざるべからず。故に、熱心なる同情同感を有する人にあらざれど、決して教育家となることを能はず。

○如此く教育家たらん者は、身を以て教育に捧ぐるの決心なかる可らず。されど、教育家は、父母が其愛子を教育するが如く、名利の上に超出せざるべからず。彼の僧侶が法衣を着して其口を糊するの具に供するが如く、俸給の爲に其職を盡すが如きは、教育の腐敗せざらんと欲するも得ざるなり。

○又憂ふべきは、女子教育の進むに從ひ、一種の弊害を生ずるに至らんことなり。歐洲諸國の顯況を觀るに、教育ある婦人中、一種の社會を生じ、男子を忌み之を厭ひ、生涯獨身を以て終らんとするものあり。此等は、種々の事情の爲に嫁期を失したるもの多しと雖も、今日に於ては、既に一社會を爲せり、我國に於ては、未だ其弊害を見ずと雖も、女子教育の進歩するに從ひ、自ら其弊風の生ずるや明なり。されど、女子教育に從事するものは、最も此點に注意せざるべからず。

○要するに、此如き弊の生ずるは、女子の智感進み、從つて男子の行爲、我儘を惡み、社會の出來事に不平を抱き、遂に自ら超然たらんとするより起るものなり。然れども、女子は國家の母、男子の母たることを自覺せど、此の如き不平を慰むるに足らん。故に、慈愛善良なる母となり、貞良靜穩の婦たることを勸め、また之を喜び之を好むに至らしめざるべからず。然らざれど、女子教育の進むに從ひ、一種不幸なる社會を生ずるに至らん。云々。

●本邦美術史　農商務省より佛國博覽會に出品せんとする本邦美術史は、左の如編せられたりといふ。

上卷 第一部 緒論　上代　推古時代
天智時代　天平時代
第二部 弘仁時代　藤原時代　平氏時代
下卷 第三部 鎌倉時代　足利時代　豐臣時代
徳川時代　年表

●高等女學校設立の理由　富山縣會にて、議員某、高等女學校新設の理由を質問せしに、書記官なる矢田部某、之に答へて、これを設けざらむ、内地雜居の時に至らむ、縣下の女子耶蘇學校に入學せん弊ありといふ。この言偏したるに似たれども、よくその要を得たり。宗教主義の學校必しもあしゝとのみはいふべからねども、多くは外人之にたづさはれるによりて、生徒もよきことに思ひて、之に倣ふめれど、日本風の家庭に適せざる風あり。それのみならず、私ものなる宗教主義のはありながら、純粹なる國民教育の女學校なしとては、如何はすべき、いまだ一校だもなき縣もなきにあらず。一日もとく設立あらまほしきなり。

●夫妻の孝貞　越中の國、新川郡、加積村に住める江野庄吉、及その妻某ともに、打ちそろひて、孝貞の聞え高く、縣下の學校は更なり、山形縣のある學校よりも、その性行を聞き合せて、修身教授の材料にせりといふ。かゝることの多くきこゆるは、よろこぶべし。

●婦はかくぞあるべき　みくにを思ふまごゝろは婦なりとて、男子にかはるべしやは。筑後の國、久留米市の裏町に住める、吉山敏子といへるは、今年五十五歲なるか、今は夫はなくて寡居なり。常に皇國を思ふ心ふかく、志たかく固きこと丈夫に劣らず。婦ながらも、事あらむ、一かどの業をなして、皇恩に報いまつらでやはなど、心にかけたる折しも、さきごろ九州に陸軍の大機動演習ありしが。敏子せ

めては軍人の宿泊をたにも引きうけて、及ぶかぎりは、心力を盡して、萬分の一の報恩にもとて何くれ設などして思ひ期したりしを、この處の委員ども、敏子年も若からず、まして寡居なれど、手もとゝくまじとてこゝをは取り除きたりしを、敏子口惜しく思ひて、

大君に盡す心は深けれど
淺き女の身と生れては

と歌よみて、委員の許にれくれりしかは、皆きゝつたへて、將校兵士どもゝ、敏子の心ばへを感じて、たゞちに五人の軍人等來て宿泊せり。敏子喜びて、人などやとひて、手助とし、朝夕の食物など皆みづから調理して、厚く待遇せしかど、彌感歎して去にきといふ。歌は心ばへには劣りたれど、赤心見えてあはれなり。わが國の婦としては、かゝる心がけ肝要なり。

●讃州の貞婦　讃岐の國、高松市、西濱町に住める太田すぎといへるは、今年五十八歲なり。幼くして父に別れ、母の手一つに人となれり。十二三歲のころより、孝行の聞え高かりけり。さて二十歲のころ、母のひさは、女年ころにもなりぬれどとて、爲八といへるを婚養子にとりてあはせたり。さて後、爲二といへる男の子をも設けて、仲らひむつましかりしを、母いかにか思ひけん。すぎを一間によびていへるは、妾三十七歲にて、夫に後れ、後わが手一つにて汝を養育せり。汝も今三十七歲にもなりたれど、爲八を離別して、母と共に寡居せよとて、動くまじきけしきなれど、すぎもそむかれじとて、夫爲八に語らひ、心ならずも遂に離別せしは今より廿一年のむかしなりき。かくて後は、老母をいたはりなか

ら、眞子爲二の養育に怠なかりしが、爲二、十八歳の時、東京に來て、陸軍幼年學校に入學せり。後老母ひさは七十一歳にて身うせたり。爲八は後、故ありて東京に住めりしかど、かげながら爲二の身の上など監督して、心を盡くしゝに、甲斐ありて、幼年學校をも卒業して、陸軍士官學校に入り、さきころこゝをも卒業して、陸軍少尉に任ぜられ、同縣通善寺村なる四十三聯隊附を命ぜられしかど、父子うちつれて歸郷せり。こゝに去月下旬町内の老人ども、仲にたちて、爲八とすぎとをもとの如く再縁せしめしとぞ。さきに離別せしよりことし二十一年目なりしといふ。これ世にまれなることゝいふべく、すき女の貞節、千古の鑑とすべし。

●茨城の貞婦　茨城縣、久慈郡、太子本町に住める人嶋崎由之助といへるは、今年五十二歳になれり。妻をやすとて、四十五歳なり。常に貸車と、魚を鬻ぐとをもて家業とす。子二人あり。長をきそとて廿六歳、次をふゆとて二十二歳になれり。さてこの由之助、明治十四五年の頃より、あさましき癩病にかゝり、年を追ひて、重りゆきて、果は兩眼もしひ、手足、指さへ落ちたるほとなりしが、後には身體は健康にはなりしかども、この病にかゝれる者の常とて、常にひがみ心ふかく、何くれ言むつかしくして、皆困じ果てき。かてゝ又講談落語などを好みしが、この病にかゝりては、一しはこれにふけりて、かゝる藝人などの來れど、二十日三十日になるまで、わが家に宿しおきては、夜となく晝となく、語らせては聞くを例とせり。家もと裕なりとにも非ず、わづかに其の日を送るばかりなるに、妻のやす女、すこしもひるまず、身を粉にくだきて、家業をつとめは

げみながら、看護怠なかりしが、五六年前よりは、次女のふゆも亦同じ病にかゝれり。やす女更に心をはげまし、力をつくして、家事一切を引うけながら、二人の看護に怠なしといふ。不幸にして、夫と子と二人までかゝる病にかゝれる、誰かはあはれと思はざらん。かゝる中にも、やす女心をかへず、益々貞節を堅くす。感ずべき婦といふべし。

●豫州の孝女　これもいと頼もし。伊豫の國、乃萬郡、乃萬村の長橋きさよ、同じきつきよといへるは、乃萬尋常小學校の四年生にて、さきごろ母を失ひて、今また父重病にかゝれるを、看護怠なく、しかも學力他生に勝れて、全校中たぐひなしといふ。されば校長村長ともに、兒童の鑑なりとて、物を賞與せりときく。たのもしの少女よ。あはれの子よ。ゆめなたゆみそ。艱難汝を玉にすともいへるぞ。やよや。

●ひきちがへて　あさましきがあり。三越路の越路のといへど、いとやさしうきゆるか、いまその越路の空より、雁のもて來て、ねとしつる玉章に、うたてき言ぞあなる。越後の國なる西蒲原郡、地藏堂小學校の女教師に、古澤よい子といへるがあり。何を如何にしてか、算盤もて生徒を毆打しつとて、その生徒の實父これを告訴せりといふ。教師と、生徒と、實父と、何れか理あらんか。いま知るによしなし。さはあれど、女としては、あら〳〵しきに過ぎたり。如何なることのあれぞとて、人の子寶を、みだりに、うちこらしつべしやは。はた、まして大君の御寶をや。生徒も生徒なり。目のあたりの有しやうはしらねど、常によく師の教にしたがひて、從順ならましかば、かゝることもあらざらましを。親も

觀なり。實に告訴すべくはありとも、常にわが子をそのもとにやりて、敎をうけさせながら。外に道もあるべかりしを。この前に見えたる、豫州の孝女のことなどを見ぞ、愧ぢて身のおきどころもあるまじかるべし。同じく日本の國に生れ、まして同じ處に住みながら、さりとはうたてきかぎりなりや。すこしはかへり見て、みなともに身をつゝしみて可なり。

●楠公の菩提寺　なる觀心寺は、河内國、南河内郡、川上村、字寺内といふ處にあり。この本堂は、もと僧空海(弘法大師)の建立せしものにて、千餘有年のむかしのものなり。このほどいたく朽頽したれどとて、古社寺保存規則によりて、保存金の下附を出願せしに、大坂府吏出張して、工事の設計を取調べたりといふ。さてこの中中院といふは、楠公の學問所にて、もとのはいたく頽癈せしかど、後年位置を變へて、たてかへたるなりといふ。さてこの本堂といふは、千有餘年のむかしのものにて、美術上、歷史上必ず保存すべきものなれど、事必成るべきならん。

●賣花婦　手なれたる竹籠に、四季をりをりの花を盛りて、うち水麗はしく肩に擔ひ、朝蚤くより、兵庫神戸の町々を、花や花、花召しませと、賣歩くは、いづれも婦人ならぬはなく、而も身には常に襤褸の衣を纏ひて、卑賤なる者どもなり。獸の肉、鞣革をこそ鬻ぐべきに、花とはいとゑをらしと尋ねれど、往昔、水戸義公の、こゝなる湊川に、楠氏の碑を建て給へる折の事なりし。誰訪ふ人もなき楠公の墳墓に、朝な〳〵詣で來て、閼迦を汲み、花をたてゝ、墓邊を拂ふ婦人ありけるを、司の役人怪しみて其の故を問へど、妾等は程近き穢多にて候ふが、建武のむか

し、妾等の祖先なるもの、宮方の大將楠殿の亡骸を、この處に埋しまゐらせしより、子々孫々遺志を承けて、斯く御墓を清め上つるなりと申し立けれど、義公これを聞き給ひて、いたく其の志を賞し、永代花賣の免許を與へ給ひけるより、今に至るまで、兵庫神戸の賣花婦は、皆な妾等の社會なりと語りけるとなり。芳行淸志、いと嘉すべき佳話にこそ。

●兄弟四人皆軍人　群馬縣、北甘樂郡、西牧村、廣澤七造といへるは四人の男子あり。長男七太郎は、步兵第十五聯隊一等卒に、次男平作は、近衛砲兵二等軍曹に、三男喜三郎は、近衛步兵一等卒に就役し、四男善太郎は、本年十一月東京灣要塞砲兵に入れり。征淸の役には、善太郎を除き、兄弟三人、遼東及び臺灣に轉戰し、何れも軍功あり。此程に至り、兄弟三人共勳章年金を賜はれりといふ。

●郵便貯金規則改正　郵便貯金預入著るしく減じ、拂戻を請求する者のみ益多き傾向あるより、當局者間には、貯金手續法を一層簡易にして、郵便貯金法を奬勵せんとの議ありしか、去る九日、遞信省令三十四號を以て、預け入を爲したる局所に於ては、預り金高の內十圓迄、又再度通帳を所持する者、其再度帳を受領したる局所に於ては、其繰越金高の十圓迄、即時拂の取扱を請求するを得。とありしを改めて、金高二十圓とし、又一圓以上の預金を殘し置くべし。との規定を、十錢以上と改めたり。又郵便爲替貯金管理所、及同支所々在地の貯金取扱局所に於て、貯金即時拂の取扱を爲さずとの條項は、删除せられたり。

●歌文同攻會　去し五日水難救濟會の會場にて例會を催せり。出席者は、佐々木昌綱、琴陵光熙、石

栁千亦、井原義矩等の諸氏にて、當座題、競點等あり。なほゆくさきは諸大家の賛成をもとめて、歌文研究の一團體とすべしといふ。よきことなり。

●ゆがみ定規　東京、小石川邊に、或る耶蘇の教會堂あり。多く信徒を求めんとて、安息日の日、或る耶蘇教主義の女學校の講師某を聘して、講筵を開かんとて、まづ說教にさきだちて、人々に菓子を與へしに、集れる人、忽ち百人ばかりなりしが、さて與へ終りて、いで說教といふ時には、皆去りて殘れるは四五十人ばかりなりしといふ。さて又その次の會には、菓子だも與へざりしかば、集まれるもの、わずかに二三十人に過ぎざりしといふ。印度アフリカなどいふ野蠻國にてこそ、この手段を行はるべけれ、わが日本、しかも東京などにては却りて功なかるべし。心きゝたる如く見えてなかなかに迂遠の手段といふべし。

●不死身の奇女　斫れども、突けども、いさゝかも苦痛を感ぜざるものを、世に不死身とは稱するなり。是ロ、其の不死身の中にても、いと稀なる類例なるべし。西印度トリンダッド島の產なる、エバチヤ、ダルドーといふ雜種の女は、生れてより二十六歳の今日に至るまで、曾て身體に苦痛を覺えたることなく、病に罹れることも絕えてなし。爪の下に針を突刺し、燒鐵を皮膚に當て、ナイフもて肉を斬るも、毫も苦痛を感ぜず。一時間か二時間の後には、其創全く平癒して、痕を止むることなし。又醫師の到底血の流出を止め得ざるときにも、みづから其血を止めんと欲せば、之を止むべく、出さんと欲せば、之を出だすべく、靈妙不思議の自在力を有せり。或は蝮を捕へて、其腕を咬ましむることあれども、爲め

に何等の苦痛を覺ゆるとも見えず。虎列剌、ヂフテリア、窒扶斯等の病毒を取りて、之を種うるも、毫も感染することなし。此女に就て、種々の實驗せる、博士プレイフエーアは曰く、この苦痛を感ぜざるは、司動神經と、司感神經との間に、關聯の存せざるが爲めなり。彼の生命を奪はんとせば、直ちに心臟を刺すか、頭腦若くは脊髓に大打擊を與へざるべからず。然らずんば、如何なる手段を以てするも、容易に其死命を制する能はざるべしと。數多き醫學者の實驗は、愈以て彼が不死身たることを明かにするのみなれど、孰れも其不思議に驚かざるはなく、米國は更なり、歐洲諸國にては評判高く、之を觀みんとて、遠きを厭はず、其地にゆくもの頗る多しといふ。

●塙檢校改葬義金募集　井上頼國先生、主唱者となり、久保悳鄰、逸見仲三郎、佐伯有義等の諸氏賛成して、檢校を改葬せんとす。いとよき企なり。その主意書なりといふをかゝぐれど、

嗚呼塙先生の墓、先生の世に在るや、番町に和學講談所を設け、群書類從（本書は豫約法を以て出版す是實に古書保存豫約出版の鼻祖たり）を始め、其他諸書を編集校訂し、又學徒を教養して大に國學を興す等、實に其大功は現時將來に亘りて不朽の偉勳なる事、既に世人の明知する所なり。苟くも國史國文儀式禮典歌學等を修むる者にして、先生の餘光に照されざる者は、絕えてなかるべし。曾て聞く先生の墓、四ッ谷寺町安樂院内にありと予輩去六月之に參す。然るに明治維新の後、同院廢絕して境内過半民有に歸し、墓邊從て荒蕪し、其狀實に措くに忍びず。況んや先生の石碑、傍屋の便所に接近する事、僅々數尺を出ざるに於てをや。因て有志者諸氏の同賛を得、同墓地の適所に之を改葬せむと欲し、今回先生の遺族に議りて委託を受く。今や將に着手して之を結構し、且將來每歲の祭祀を斷ざらむとす。諸氏それ之に同情を表し給はゞ多少を論ぜず、經費を寄贈あらむ事を希ふ。

一寄贈金は總て東京市麴町區麴町二丁目十四番地井上頼圀宛にて御送附あれ

一爲替劵にて御寄贈の御方は麴町二丁目郵便局

へ御振込あれ
一義金募集人は決して差出ざるに付必前記の名宛へ御屆あれ
一贈金期限は本年十二月二十五日までとす
一贈金到着の節は請取證を直に發送すべし

●水石契久　といふ題にて、さきに、佐々豐水夫婦が六十一の賀に、ひろく和歌を募りしが、其の歌一千二百十二首ありしといふ。其うちに、

正三位勳三等侯爵　前田　利嗣

よろづ代も君ぞならはん湧いづる
岩ねのみづのつきぬちぎりに

津守男爵女　覺　子

若かへるふた葉の松も今日よりは
かはせの石によはひちぎりぬ

●皇朝婦女鑑　本誌に掲載せし婦女子の傳に、なほ遺れるをも拾ひ集め、之に訂正增補を加へて、編纂したるものなり。第一篇には、太古より奈良朝以前のもの數十人ををさめたり。婦女子の龜鑑として坐右に欠くべからざるは論なく、新年のおくりものなどには、最適當のものなるべし。委しくは廣告欄を見るべし。

◎本誌新年附錄　として、女鑑第百四十八號には、
龜山天皇　後土御門天皇　明正天皇　櫻町天皇　御製和歌の宸翰、小色紙形四葉を、大版一枚に印刷して、愛讀の諸孃にわかたんとす。
來ん卅一年一月五日を待ちたまへ。

●日數も殘りすくなになりにたれど、おしなべて年のいそぎに、ほど〳〵につけて忙はしかるべし。よく整へて、心安く年を終へ給へ。やがて來ん年のはじめにとて、今は筆をおきつ。



十二月廿日兼題　田家歳暮

天　東京日本橋區濱町一丁目廿四番地　諸井くら子

手つくりのさけあたゝめて村人も
君か代いはふとしのくれかな

地　同區村松町四十七番地　舘脇ます子

みしめなはとよりかくより賤の男も
春のまうけをいそくくれかな

人　肥後國八代郡八代町長丁　田代綾子

賤のめか春のまうけと織るはたの
音いそかしきとしのくれかな

人　三重縣伊賀府中村　服部かつみ子

はるぎにと賤のをとめかおる機の
おといそかしきとしのくれ哉

人　横濱眞砂町二丁目廿七番地　畠山香代子

賤のめか春のまうけとおるはたの
おともひまなきとしのくれ哉

秀逸（二十首）

ふり積る田つらの雪のゆたかにも
みゆるさとわのとしのくれ哉　永井さい子

わせおくてかり収めたる田伏こそ
歳のくるるもゆたけかりけれ　佐々小琴子

心なのかゝしもいまは朽ちはてゝ
くれゆく年をとめんともせず　宮原ゑく子

賤の女かいとなむ業もひとしほに
いとまなけなる年のくれかな　住山幾子

里の子か春のまうけに織るはたの
をさ音いそくとしのくれかな　美奈井芳子

かりとりし田毎に麥もまきをへて
はるまちくらすとしのくれ哉　名取よゑ子

賤のをか門たのおしねかりあけて　降田満起子

ゆたかにれくるとしのくれ哉

賤の女か糸ひきくるまいそくまに
いよ〳〵せまる年のくれかな　田代　艶子

髮あくるまをたにかこつ賤のめの
去つこゝろなきとしのくれ哉　高井　孟子

豐年のみつきも終へて去つかやは
門田ゆたけくくれそめにけり　永田たね子

賤の女か春のころもとれるはたの
たともせはしきとしの暮かな　西　艶子

一歲のたのみはくらにとりいれて
こゝろのとけきとしのくれ哉　日吉あさ子

一年のいとなみ終へてしつの家も
こゝろゆたけき年のくれかな　池田なほ子

すき鍬もあらひをさめて人なみの
まうけうれしきとしの暮かな　植田てふ子

穗なみよきことしの秋に來んとしも
ならへと民のいはふくれかな　吾妻ちか子

かりそめに結ひし小田の菴なれと
年のいそきはかはらさりけり　林　久子

たなつもの處せきまて取りいれて
こゝろたのしきとしのくれ哉　遠山たゝ子

淋しけにかゝる門田のみつくるま
めくりてはやく年はくれけり　內藤小夜子

しかすかにとしのくれとて里人は
いとなむわさのいそかしき哉　福原　[illegible]子

賤のめか春のまうけと織るはたの
殘りすくなくなれるとしかな　泉　さい子

（以下原稿到着順）

われのみか門田のひつちゆきつみて
こゝろほそくもくろゝさしかな　木川里子

あしひきの山田のいへにすみなれて
我か身につもるさしのくれかな　仁保基子

それそれにいさなみ繁くみゆるかな
やまたのいほのさしのくれかた　吉弘周子

秋のもの心ゆたかに收め卒へて
やすけに見ゆる年のくれかな　浦井登代子

たくるまのめくる月日はあやまたて
さしのいぬめる小田のかりいほ　鷹野靜子

事しげきみやこはいかにかたさきも
さしのくれこそいそかはしけれ　高橋きん子

こん年のいさなみしげきをとひとも　こゝろはいかにたのしかるらん　中山嘉壽子

秋すぎてかりたのあともさびしげに　見ねてしつけきさしのくれかな　水上浪子

小山田にこほる根ぜりもはるめきて　はやくもさしはくれにけるかな　住山靜子

小やまたの畦がふせやもたつけふり　ゆたかにみねてくるゝさしかな　河田いし子

なちかたの田なかの庵もうちすてゝ　さしのくれさてにきはひにけり　輕部壽子

なにごさものさかに見ゆるひな人も　さしのくれこそいそがしげなれ　田中ゑん子

みのりよく民もにきはふこのくれは　くさの戸ざしもいそがしげなる　木村きく子

あきのものこゝろ豐かに收めなへて　たもりもやすくはるをこそ待て　浦井さよ子

ゆたかなるあきのみのりの後なれは　くるゝさしさへのさけかりけり　山手てい子

小山田のいふせきしつかふせやにも　もれぬはさしのくれのいさなみ　永井まり子

むらさとはゆたけき中のしるしさて　しはすのそらそにきはひにける　高島壽子

新しきさしなむかへんいさなみに　ゆきかひしげき小やま田のさと　大條涌里子

さとのこがちさぜのよはひ重ねんと　みやまにたてるまつのひさねた　黑瀨すゑ子

山がつはたきゝこりつみしつか女は　はた織りつゝも暮るゝさしかな　堀内敏子

あしひきの山田のささのさしのくれ　たてるけふりもゆたかなりけり　佐々有鄰子

むつましくしつが門田のいほりには　御代よろこひてさしそくれゆく　冨士村ひさ子

ゆたかなるこさしの暮なここほきて　またこんさしないのるしつのを　冨士村巖子

鳴き渡る田鶴の音さむしやまさとも　なごりおほゆるさしのくれかな　大谷友子

かきつたの門にもけふはまつたけな　たてゝはるまつさしのくれかな　小野田のふ子

春あきのわかちもしらぬなやま田の　しづかふせやもさしのくれぬる　土肥仙子

やま里はひさめもくさもかれはてゝ　さびしさまさるさしのくれかな　久本はな子

世なさけて田伏のいほにすむみにも　こゝろいそしきさしのくれかな　無名

世ばなれし山田のいほもくれてゆく　さしのなごりはのがれざりけり　德永萬壽子

なかなかに田つらの里もにきはしく　まつたけたてゝいはふくれかな　荻原章子

みちのくの松をもたてすあるいほも
おのづからなるはるやまつらむ　岡澤千鶴子

しかすかにさしのくれさて草の家の
しつか手わさもいそかしくみゆ　失名

ゆたかなるみのりをさめし小山田の
ささにきはしきさしのくれかな　濱谷いく子

年の尾もみしかくなりてしつのめか
はた織る手までいそかしきかな　青木春子

あせつたふ人の歩みもいそ〳〵さ
みゆるやまたのさしのくれかな　寺田まさ子

年木こるしつかふしみのささまても
みのほさ〳〵にはるをまつらん　土岐米子

賤かやもいなほしをへてきのふけふ
はるのいそきにいさまなけなる　金森さし子

夜に晝に織るや小はたのいさまなき
を田のしつやのさしのくれかな　山本能子

ゆく年のいそきに立つるけふりさへ
のさかに見ゆるをやまたのささ　谷口ふさ子

をちこちのささ靜かなりむらひさは
こゝろのさかにさしおくるらん　岡澤倫子

昨日今日さしのみつきもをへはてぬ
しつやのさかにはるをまつらむ　今村順子

よればつみむきまきをへて賤かやの
のき端にきはふさしのくれかな　名取正代子

またさらにゆたけき年をむかへんさ
ひなもにきはふさしのくれかな　坂田きみ子

人さはぬよしたのささもなにさなく
いさまなけなるさしのくれかな　小澤圓子

くれのころ年をなしみてしつかやも
いさいそかしきはたおりのおさ　吉田二千代子

ゆたかなるさしをおくりてささ人は
のさけきはるやまちわたるらん　屋摩高繁子

年ごさにあふさはしれさいさせめて
しはしさめたきさしのくれかな　田中ひろ子

こん年をむかふるさまはしかすかに
ひなもみやこにかはらさりけり　長島英子

しつのめか春のまうけにいそかれて
はこふはりさへわひしかりけり　星野菜香子

すゝはらひしめ縄はへてたのしけに
ひかすかそへてうたふささの子　星野千春子

なにごさものさかにすくるやま里も
せわしくみゆるさしのくれかな　武藤いれ子

ほさもなき月日さ思へはやまささの
ひさのこゝろそせはしかりける　武藤しけ子

あしひきのやま田もる身もよのひさの
かすにはもれぬさしのくれかな　岡田陽子

鄙もまたさしのいそきにうちつれて
ゆききもしけきをやまたのささ　野木常子

いそかしき年のくれとしなりぬれは　小田のいほりもかしましきかな　弘田しも子

こんはるのゆたけきみねて賤かやの　けふりにきはふとしのくれかな　武田さん子

ゆるやかに月日をおくるやまさとも　なすことしけきとしのくれかな　遠山りう子

さとひとのいとなみはてぬ年の暮は　いととつきひのをしくもあるかな　遠山よしな子

おくて田もみなかり入れて賤の男か　こゝろのとかにおくるとしか　内藤秋子

里の子かしりくめなはになふわらも　のこりすくなくなれるとしかな　内藤千代子

春を待つはれきなるらむしつのめか　おるや小はたのおとのせはしさ　内藤佳子

積みあけしたわらの數をかそへつゝ　ゆたかにとしをおくるたのしさ　持地桃枝子

わせおくてかりをさむれと今さらに　としのくるゝはをしまるゝかな　淸水益子

ありあひの藏をかさりにいとなめる　たなかのいほのとしのくれかな　藤島英子

あせ路を行きかふひとのあゆみさへ　いとせはしきはとしのくれかな　池谷宮子

時の間もいとなきたみのすみかにも　とゝめまほしきとしのくれかな　戸塚てつ子

たゆまなき賤か手わさのいとくるま　めくりてはやきとしのくれかな　中桐杏子

あけくれに賤が手なれしすきかまも　みかきをさむるとしのくれかな　小曾根しう子

年くるゝいそきはみねていりの　たなかのいほもいそかしけなる　江口さみの子

花にあけ雪に暮れゆくやまさとも　まつきるおとにこゝろせかるゝ　矢島ねい子

庭もせにひよれつみてみたからの　うらやすけなるとしのくれかな　弘田ゆき子

ひなもなほ春のいとなみしむけんと　くれゆくとしにいそかるゝかな　宇多田楊子

をやまたにつみかさねある稻からを　はこふやいつことしのくるゝに　宮原貞代子

みつき物くるまにつみてしつのをの　みやこにいたすとしのくれかな　下元もと子

みつきものをさめて賤はのとかにも　よれとしとをいはひつむらむ　上原能夫子

かと松をきり出すしつのいとなみも　いそかしけなるとしのくれかな　重松たか子

ゆたかなる年のくれとそしられける　みつきをさめし小やま田のさと　宇高松子

天さかるひなのたふせのいほまても　なすことおほきとしのくれかな　宮地孚子

ゆく年をおくりむかふるまうけまて
すくなきひなや住みよかるらむ　近藤好子

よしあしをわかぬなにはのかた田舎
ひさしくよろすさしはみにして　野中あさ子

くれはつる年もわすれて賤かやは
あけゆくはるをまちあかすらん　伊東美代子

小山田のわらやののきもしめはへて
またこむとしのいそぎするかな　河村君子

ゆきゝする人こそあられまぐさかる
ひなもいそしむくれは來にけり　楠花雄子

こよみなきこのやま里もかさまつを
けさはたてたるとしのくれかな　下村さた子

賤のめかいさ引くくろまくりかへし
かへらぬとしをならんとすらん　下村たけを子

賤か家はさしあるあきにあひつれは
こころのさけくとしやくらさん　仁保しま子

米はつみたき木はさくにこりいれて
たもふこさなきとしのくれかな　尾田稲子

こん秋のゆたけさをさへいのりつゝ
にきはふを田のとしのくれかな　小林ふち子

新米もをさまる御代のとしのくれ
ふつかふせやのにきはしきかな　石川類子

いさまある身もいとまなき年のくれ
いかにやあらんしすかすまひは　石川楽子

あれはてししつかわらやも門松を
いさなみたつるとしのくれかな　石川久子

賤のめかあかつきおきにおるはたの
おともひまなき年のくれかな　山田璋子

みのりよき門田のいなほしめなはを
ひきなしめさもとしくれゆく　佐々木こ花子

十二月廿日兼題　爐邊閑話

天　山梨縣甲府市山田町　名取正代子

あられたばしる冬の霜夜、北山おろしさへ、吹きかへして、身にしむばかりなるに、あたりをとざして、埋火かきおこしつゝ、おもふどち、むつがたりすれば、そともの寒さは、ゆめのまに、打忘られて、さながら春の心地せられ、猶さしそふる櫻炭は、名におひて、花のにほひいづべくぞおもほゆる、ひとりゐてだに、埋火は親しき友となりぬべきを、ましてこをなかだちとして、あまたの友どち、かたりあふ夜のたのしさよ、長き夜も長しとはおぼえず、夜すがらいねもせざれど、ねむしともなし、かくておの

かじゝ、言の葉草のつきせぬまゝに、幾度か炭さしそへつらん、今や炭斗のむなしうなりぬるに、おどろきて、さとりし頃は、はやひんがしの空、しらみそめて、曉つぐる鳥のこゑするも、又をかしや。

地

越前國敦賀港曙　久間有隣長女　久間春子

吹きあれし、ひるの嵐、なごりなう靜まりて、夕つかたより、しくしくと、降り出てたるが、いつの程にか、白う二寸ばかりも、積りたる、いみじう嬉し。かゝる夜は、思ふどち、木の芽など煮て、はかなき物語に、更け行く色景をも、見たらんには、いかに面白からんと、とみに思ひつきて、まづ、誰彼の君に、消息す。

埋み火を掻き起しつゝ待つ霄の
こゝろ深さは雪にまされり

釜の湯の煮ゆ音高く成りにけり、
いさ訪ひ來ませ雪も見かてら

歌のやうにもあらねど、書きはてぬまにと、急ぎて、いひやりけるに、中には、其の紙の片はしに、をといふ一文字を、書きそへて、かへされし、いと心にくし。やがて、三四人訪ひ來て、常思ひ隔てぬなかとて、畏りもおかず、かゝる折は、すびつの、はたこそ、こよなき、あるじまうけなれと、打まとゐしけるに、

今一つしとねをもてこ門に又
雪打ち拂ふ音きこゆなり

と、いひも終らぬに、入り來給ふは、彼の、を文字そへ給ひし、方なり、

道もなく積りし雪を掻き分けて
訪へる心の深さしりつや

と、のたまふに、まだ夜も淺ければこそ、もし明けはてたらんには、もろこしの、何某とやらんが如く、舟にはあらでも、車引きもどさせ給ふなめり、など、皆々笑ふも、をかし。かくて互みに、はかなき事ども、いひかはすに、果々は、聞きにくき事をも、いでくべし、さらば、何をして、今霄の興を、そへんなどいふに、を文字の君、雨夜ならねど、彼の品定

めの人々を、くじにして、歌よまんと、の給ふに、それをかしからんとて、人々ひくに、いひ出で給ひし君は、極ねちの草薬、服したりし女に、あたり給へど、博士は博士なりけりとて、皆々又笑ふ。指喰は誰、木枯らしの君は誰ならん、妾は尼になりつなど、いひ騒ぎて、終には、歌もよまずなりけるに、紙窓明く、月のさし入りたれど「おのがじゝ定めかねたる品々を」と、一人がいふに、片への人取り敢へず、「定め貌にものぞく月かな」と、つけたるも、をかし。かくしどけなく、笑ひどよめきて、釜の湯の煮えおちたるも、覺えざりしに、傍らに侍りし、女の童、いつの間に作りたてけん、大きなる箱のふたに、雪の山おもたげに、持ち出でたる、思ひかけぬ事とて、又をかし。かくも積りたるにや、雪こそ今宵の、あろじざねなれとて、やり戸押しあけて、皆々立出つるに、おくなき庭の木立ながら、いと深う積りたるに、月さへ限なく、さしそひたる景色、いはんかたなく、おのがじゝ、又おりたちて、彼の作りたる、山にもりかさねなどして、

夜もすから語りあかして月と雪
光りの果の品定めせん

といふ人あれど、又

女の童はなの枝炭さしそへよ
曙までは程もこそあれ

と、いふ人もあり。此雪の山、いつまで、とけずあらん、そを争ひおかんと、いふ人もあるに、彼の博士の君、そは清原のおもとならではと、いふも又をかし。

人　　淡路國三原郡廣田村　泉　さい子

人目も草も枯れぬへき此頃を、いかに過させ玉ならんと、友かり消息なしければ、われを淋しさにたへすとて、其暮方訪ひ來玉ひぬ。さて何はかりのまうけもなしと言へば、いなとよ、冬は唯火桶とりまきて、隔てなく語らふこそなか〳〵によけれど、かたらふまに〳〵、今年もはや暮なんとするを、何のなす業もなくて暮にける事よとかこては、あな心弱さ

事なの玉ひそ、彼の園の梅が枝は、霜にうたれ、雪に埋められつゝも、來ん春は花咲き、薫りを放たむとするならずや、己はしか思へりなど、いと高やかなりや、かくて己も奥かりて、古の文とも、近き世の歌がたりなとするほとに、いたく夜はふけ、寒さを覺ゑて、火桶を見れは、宵の程かき入れたりし炭も、今は皆灰となりたるも、いとをかしくてなむ。

思ふとち語り合ひつゝ埋火の
　灰となるをも覺ゑさりけり

（以下原稿到着順）

高橋きん子

四方の山々雪つみて、林の梢を花さみれど、空吹く風のいと寒く、人目かれぬる籠の庵は、いや淋しくつれ〳〵なる時しも、雪ふみわけて、柴の戸をたゝく人ありければ、早く戸をけあて出迎ふに、ゆくりなくも、魂合へる友のたづね來たれば、げに珍らしく嬉しきまゝに、いそぎ埋火のもとに誘ひて、うつりゆく浮世のありさまを語りつゝ、なかしきふしもあれど、うかりしふしゝおほくあれば、そをおきて、雅びたる、言の葉の道にわけ入りて、問ふも、しつけく、かたるも、のさけく、づれ〳〵を慰め淋しさを忘れて、ひれもす樂しくあれば、冬の日あしのいさゞ短く、おぼゑて、あかなくに、はや夕ぐれさなりぬれば、又のあはん日を、契りて、友のかへりたりしぞ、名残りをしくありける。

冬ごもりうさをわすれて樂しきは
　友とかたらふ埋火のもと

輕部壽子

用事ありて、親しき友だち朝早く來れり、寒むき日なれば、しひて爐邊へともなひ、茶など參らせ、妾等幼かりし日の樂みを語りはじめぬ、そはある秋の茸狩なりき、其日定まれば、照る〳〵法師といふ物を紙にてこしらへ、などして、天氣を祈り。前の夜ば、寢てもねられず、度々起きては空を見るに、木の間に、星の、きらめきたるまづうれし、あくれば、辨當を家僕に、おはせて、行くに、何ならぬ野邊も面白くて、きのふ、手習の、歸りに想像せしたぐひならず、山に入りて、初茸なも、獲れ得し心、邪なき望ははや滿ちたり、こゝにも三つ、かしこにも二つと、籠にとり入れ谷におり峰に上りて、ひろも過ぎぬ。程よき石を見つけて落葉かきのけ、腰うちかけて、辨當ひらきしこそ又更に樂しかりけれ、母上の心つくして、にぎらせ給ひつる飯のある、うへに、家僕は草葉かきわけ清き流をさへ汲みきたりぬ。一日遊び暮して、大方歸りは道より夜に入るに、家路の空遠くうちかすみ、城のやぐらの隱れ行くなどあはれにて、いかに母上の待ちおはすらん。はやく野山のおみやげをさそ、いそがれしかなと、たがひに心を打とけつゝかたらふほどに思はずも、早や時計は五時を知らせけり。雪の夜爐邊にて話する稍樂しきはなし。

浦井豊子

花も紅葉も散り果て、目をなぐさむるものもなく、高根をさわがす、

木枯の風の、音も身にしむ今日此頃は、心合ひたる友どちと、爐邊に閑話するぞ、上なき樂しみなる、今日しも風痛く吹きすさびて、白きものさへ降りそへければ、いと心寂しく、此日曜日を、如何にすごすべきと、つれ〴〵に困じ居たる折から、日頃親しき友の、二たり三たり、音づれければ、うれしさ限りなく、雪など拂ひやりて直に爐邊に伴なひ、炭かき起し暖をとらせ、巳も之にまとゐして、こし方行末の事ども、へだてなく、しめやかに、かたみ物語りし樂しさ、としの暮れの忙しさも、いみじきあれも、こゝ斗は訪はぬかと、うたがはる、興はいよ〳〵深みて、はてしなけれど、かこめるめる火も、漸くつきなんとしければ、つきぬ物語りは、來ん春をまちて、またも此爐の許につかなんと、誓ひつゝ、組みしたもとを分けたりき、あな今日のたのしさよ、友の歸りし其後も、爐邊のなつかしくて、初春の待たるゝも一入になん。

永井まり子

水無月の、あつき日は、淸き河邊に、夕すゞみするにまさるはなく、霰ふり、ゆきつもる、寒き冬の夜頃は、爐の邊りに、よりそひて、暖をとるぞ、いと樂しき、すさびならむ、されど、それにもまして、たのしきは、學びのわざをさへ、何くれの用事も、なしはて、爐のあたりに、父母はらから、打ちつどひ、物の本など、取出だし、あるは、いにしへの忠臣孝子、あるは、また、貞婦烈女のものがたりなど、聞きもし、かたりもして、長き冬のよを、ふかすはその樂しさいひつくすべうもあらずかし。

降田滿起子

冬の夜寒の月さえ渡り、ひまもる風は身をきるばかりにて、いとゞ堪へがたければ、埋火かき起し、うからはらから打集ひ、あたゝまり居たるなりしも、かれて心隔てなき隣の友の音なひ來れる、いと嬉しうて、よきをりにものし給へるかな、何はともあれ、とく火桶により玉へとて、櫻炭かきそへ、例の如くうちとけて、こよひの寒さ忘れなん、いざいざとて、各々おもしろき、をかしき、古今の物語して打ち興ずれば、幼きものどもよろこびつゝ、おのが學校にて敎へられたることなど、まはらぬ舌もて語り出でたる、いとをかし、はては、互にたはむれごとなど云ひ合ひ、笑ひさゞめくほどに、寒さもいつしか忘れはてゝ、時の移るをも知らず、只春の心地ぞする、げに冬は埋火のもとほど樂しきものはなかるべし。

月花のながめになどか劣るべき
むつかたりするうづみ火のもと

黒瀨すゑ子

今日ははりつめし氷もいとあつきに、何のなすこともなくて、やから打つどひ、埋火のほとりにまとゐをなんしける。數多き物語の末、一人が、世の中にいみじきいさをはあれど、また心ゆるせぬものは火にこそあらめといふ、げにさなり、此者一日だに欠けなばたづきの道はいはずもあれ、遂には貴き玉の緒さへ絶えぬべし、今日とても、寒さをよそに、かく打くつろぐも、またく火のたまものにこそ、されど一度あやまらば、いかにがまへ固き高殿も、世に得がたきみたからも、時の間に煙ともなり灰ともなりはつべし、あなおそろしと、思へばいとゞ身も冷えわたりてなん。

佐々有鄰子

もののふの宇治の里につみはやす春の木のめを、花ぐはしさくら炭

かき起してゐるものから、かたへに集へるたれかれうちくつろぎ、ふたつみつむかし今の物がたりに時をうつしぬるも、一寸の光陰かろからざる故人の金言を、よそになすに似たれと、中々に心をみがくたれとぞなりぬる、是の爐邊は、支那の故事も、西洋の近況もうち交へつる席にしあれば、閑話も又花紅葉色々に染なして、あやにうるはしく、終日雪のふることをもうちわすれて、あなおもしろのかぎりなりや。

大寺浪速子

飛鳥川流れてはやき月日とて、今年もまたほどなく暮なんとするきのふけふ、人には世事にこゝろのいとまなく、都大路はゆきかひも織るが如しとこそいふへけれ、かゝる山里のたゝずまひは、いと物靜かに、をりたく柴のふすぶりて、ゐろりにたぎる釜の松風、おのづからなる數寄とやいふらむ。されば諸共にたどりし學の道の、我のみ後れゆくともしらず、訪ひ來る人もいと稀に、としの暮れとて事繁からぬまゝ、今宵も埋火のもとに家族まとゐして語るは、あらけき御代の恩のありがたさ、さては老いにける人の、昔語など、くりかへし物語らせたまふに、年と共に夜のふけゆくもしらず、かゝる樣を、常から忙はしき都の友の聞きもせば、如何に山里の住みよきと思はんが、はたうたてしと言はんか、流石に心のまゝにこそ。

西　艶子

夕暮より寒さ頓に加はり、霰さへ降りしきりければ、早くより雨戸押したてゝ引籠りつゝ、夕飯とく終へて、埋火の邊りに寄り集ひぬ、まて幼き弟等と、種々の物語りなどしつる中に、ふと去にし年のやよひの頃、父母に具せられて、神戸なる湊川の社にまうでし折の樂しき事、さては其時宿りし家の美しかりし事など、談り出てゐるに、弟のいなとよ、彼處も美しかりしかど、其年の秋ばかり父君に供はれて、舞子の濱に遊びし時、立寄りて息ひし家の美しく清げなるにはまさらじなど、かたらひ居しに、父君の、およそ物事、何にまれ奢りには入り易きものなり、いかて今度は程近き邊りに、昔の旅のさまにて具し行かむ、開け行く御代の目出度さは、船車も昔の如くならず、一日に千里の旅路をも行くべく、また宿かる家も、黄金あらは清く美しきにもやどられぬへし、其に就ても、父か幼き時の事を思へかし、其頃父は學の爲、伊勢より江戸に行きしか、元より船車なかるへき黄金持たねば、終日行き勞れて、やうやう宿かる家のありとし思へは、そは汝達か去にし年の宿りの類に非す、軒かたむきし伏家にて、夜の衾も有るは名のみ、唯露霜をしのくはかりなれも、野に伏すよりはと思ひて宿りしか、嗚呼思へは今の汝達の身の上と、そもいかはかりのたかひぞ、汝達心して奢になかたきそ、物足らじとな思ひそ、もしあらぬ心を持ちなは、必すや天津神の罰きみせめをこそかうむらめと、いとねもころに教へさとし給ふ、あゝ父君はさる苦しき事にも遇ひ給ひけん、今我等のかく世を安らかに、うきをも知らて過し得らるるも、皆父君の賜ものにて、過きし年の父君の苦しみやかて我等に報い來しなるへし、嗚呼我身の幸は皆父君のつくり出て與へ給へるなりけりと思へは、胸もふたかりて、物も得云はす、たゝ畏みて承りつゝ、炭さし添ふるさへ忘れにければ、火はいつしか白うなりて、夜も早いたく更けたる心地す、いかて今宵のみ教へを忘るへき、いかてこの御言葉にもとるへきとて、其

夜燈火の元にてかくはものしつゝ、自らがあらぬ心のいましめにもさてなむ。

岡澤倫子

冬の朝、庭におり立ち、寒菊一二枝折り取りて花瓶にさし入れ、爐に炭さしくべ、木の芽煮んとて、釜かけなさせしに、間もなく煮ゑ立ちければ、古のひじりののたまひし如く、獨樂まんよりは　、愛子孃ふき子孃などへせうそこせしに、時うつさず入らせられぬ、其より各薄茶一通りつゝなして、後はかたみに話しかはし、愛子の君ゝまゝに伴はれて幼稚園に通給ひし物がたり、ふき子の君が高等小學の補習科にて初めて歌詠むことを習ひ玉ひしはなしなど、いと興ありてなかしかりき、夫より話もけ高くなり行きて、似つかはしからぬ紫のおもと清原のおもとの事などあげつらひしに、母君のほゝ笑みつゝ、何事をか語り玉ふらん、爐の火さへ消ゑぬるにとて、炭さしくべ給ふに、初めて湯の煮ゑ落ちぬる事にも心付きぬ、清原のおもとは心にくゆれとのたまひしかども、げに恥かはしくこそと、三人して打笑ひぬ。

星野栞香子

雪もふかくられねども風いと荒く、横しぶきに窓うつ霰の音も恐しと思ひわづらふ日、わざとくをへて、隔なき友二人三人、爐のあたり近う打ちより、いとしめやかに、めでたくおき出づるを、火箸もて灰など手すさびつゝ、あはれなるもをかしきも、いひ出でゝたのしむこそ、いみじううれしけれ、火の消ゑ行くも、横ざまに吹き入るゝをも、打ち忘れ語りゐたるに、ふと時うつ音に驚かされ、心ならずもつぶやきつゝ、またの日を約して立ち別かるゝなど、いかにたのしくうれしきや、されば冬のたのしみは、これを置きて何かはわらん。

林久子

さゑまさる此頃は、たゞ家にのみこもり居て物さひしさに、昨日の秋の事とも思ひ出でられて、めでゝ見し紅葉の庭に散りたるなどかきあつめきて、すひつにたきなどしつゝ、つれ〳〵をなぐさむる夕くれに、へだてなき友の訪ひきぬるも、なりからいとうれし、まつ埋火のもとによりて、炭差し添へつゝうらなくかたりあへは、心もおのづからのどかになり行きて、なかしかりしむかしの事など思ひいでられて、長き夜の更くるさへしらぬもをかし。

東京賤女

雪まじりあられふる夜の寒けさも、埋みたる火おこし出でゝは、諸手をかざし、物の本などひもときみるに、いつしか暖なるに、心地よくて眠りをぞ催しける。折しも友の音なふ聲に驚かされて、そこら打ちらしたる物ども収めまとひ、よくも此さう〳〵しかりける折ものしたまへる哉とて、まづおこしたる火をかきたて〳〵すびつのほとりにまとゐして、さま〳〵の物語をきこゑかはし、或はおのがじゝ歌がたりなどし、はては彼の雨夜の品さだめの風情はかくやあるらんと、かたみに打笑ふなど、なか〳〵に心たのしき限りにこそありけれ。

福原菫子

一年の中、何はあれど、木からし吹きすさぶ冬の日、玻璃窓固く閉ぢこめて父母兄弟、あるは、心あへるなどちなどゝ、埋火のもとに、語りあかす許りたのしきすさびはあらず。あたりは、うら暖き春の

心地して、散りくる雪も花と、霜枯の枝にかゝるをも、時ならぬ花の咲くと、眺めはやすをかしと、花鳥の色音床しく語り出る時は、そぞろ岡山の殿の中の、兄弟のむすぼれのとけしさへ、思ひいでられて、一入親しく睦はれてなん。

江口とみの子

木枯の風いと物さわがしう、みぞれさへふりきて、山里の物さびしさもひときはまさりぬれば、埋火のもとによりそひ、春をのみまちをるに、人の問ふ音すれば、たそと出でむかふるに、心へだてぬ友の、二三人打つれて問來ぬるなり、いとうれしくて、すびつのすみつぎそへなどしてまとゐしぬ、はや年の殘りもすくなきに、今日は一日樂しうかたらんとて、日比有つる事ども、もろともにかたりかはすも、こよなうたのしく、寒さも打忘れたるに、このめもて出で來しはし女の、今しも雪ぶりいでつと云へば、皆打驚きて見るに、かれはてたりし庭の面も、めつらしうなりて、うち興するに、くれゆくまゝに、空もはれわたり、月さへさしいでたる、庭の見すてがたき、こよひはこゝにやとりてなどいふも、いとうれし。

弘田ゆき子

一夜二日ばかり雪氣の空の打續きたりしに、今宵は雨さへ添ひて、降り出づれば、父母を始め參らせ、皆々埋み火の邊に集ひ寄るに、彼方なる玻璃の障子を透して見ゆるは、あやしく散りかふ六つの花びら、此方は何へだてなきまとゐの内に、言葉の花さへ咲き出て、いにしへを忍ひ行く末を思ひやりて、盡きなう、物語するを、側よりをさなき稚兒の、かたことながら、かにかく物語り出でたる、又なくをかし。

冬ごもり埋み火圍みうちよれば
はるならねども匂ふ言の葉
幾度かしらむ埋み火かきおこし
むかしがたりに更くる夜中哉

宇多田楊子

昨日は霰、今日は雪と、此頃の冬のそら、すきまもる風だに身にしみ渡り、殊更日も暮れ果てては手足も面も氷るばかりなるに、獨りたよるへき物は、爐火になんありけろ、そをかきおこしては、又世に光りなき賤が身も、御代のめぐみにあひ、うらやすく此の日を送る事のうれしさを思ふ折から、二三の親しき友たち、頃ふみ分けてとひ來りぬ、こはいかにと、たとへなのう打よろこひつゝ、はか許に心おきなうまとゐして、互に日頃のうさをなくさめ、こしかた行く末の事とも語りあひ、且つは女鑑など取り出し、我が國固有の女風の廢つらひをとなし、文に歌にその優美を愛するなど、殊更冬の夜の寒さも知らず、春の心地して、いとたたやかにあたゝかなれは、更け行く夜中も覺えず語ふ埋火の元は、けにゆかしきものにこそありけれ。

宮原良代子

月は空にわかれて雪の上ふく朝風、劒のごとし、父よ母よ、兄よ妹よ、今朝こそは爐邊にまとゐして、この寒さをさけん、かの雪をも語らん。

父はほりかへり給ひし芋などやきつゝ、我等の物語りをや聞きおはすらん、母は煮物に心をくばられ、焦すなよと曰はれ給ふ、兄は無遠慮にも、薪山ほどさしくべ給ふは、あたゝかさをさらせんために

や、火ばしもて灰に文字かきつけ、こは如何にと、已に問ふ妹は、日頃學校にてまなびしものか、自備むに書きちらすも愛らし。朝日はのぼり口、汁までにねぬ、されど、むつましき一家のまとゐは、なにくれの物語に散すべくも見ねず。あはれ戸のひまもれて、ゐろり火吹きちらす嵐、汝は今しばらく家族のために、この樂しきまとゐを與へよ。

河村君子

女郎花を見ては、その操を思ひ、尾花をながめては、その行をとがめし秋も、いつしかすぎて、朝熊おろしはげしき冬とはなりぬ、まして、今日はしも、夕つ方より雪ふり出でゝ、訪ひこむ人さへなければ、埋火かきたて腰折ひねりをる折りしも、姉君の來り給ひて、女新聞をわれにしめされぬ、われその指さし教へられしを見るに、女生徒の道ならぬ行ひをしるせるなりけり、驚きてしばしはあきれりしに、姉君いふ、開け行く御代の惠みに、女の道を教ふる學校、日にまし、賤の女の姿に至るまで、たやすく學びうることそありがたきに、その學ぶ友にして、かくあるとは、と嘆き給ふ、われも、その言葉に感じて、いにしへの人は、かくも操をつくししになど、語りあひつゝありしに、いつのまにか、火は灰がちになり、寒さいと甚だし、されど、それをも打ち忘れ居るも、をかしうてなむ。

小林ふぢ子

あすまからんとちかひし友が言の葉に、山住の伏屋の冬も、今朝はこゝちのどかにて、形ばかりの居間の塵うちはらひなどせしかひなしや。かき曇りたる空よりほろ〳〵ふりいでたる白雪にさらぬさびしきいほり都人のいかでかとふへきと思ひ絶ねだるなりしも、柴の戸、ほと〳〵と音するに、立ち出でゝ見れば、うれしや友の袖はらふにぞある。雪よりも君が情のふかゝりけるよと、ともなひ入れて、もろともに埋火のもとに寄りて、灰かきおこしつゝげにかゝる伏屋をよくもこそとひたまひつれなにには無けれど、有るほどの炭みなつきてひねもすかたりつゞけ侍らん。幸、此雪にて一首ものしたまひてはいかにといふに友もかくあたゝかき家の内にて、外面の花も花のやうにながめられ、ありし昔のあさとふおもしろき事に侍らずやさて花に遊びし春のあけぼの、月にうたひし、はた秋の夕、まては螢のともし火あつめし、窓雪のあかりに文よみし庭の姿とも、かたみに語りあひ、同じ雪ながら今日は花とも、思はれて、埋火のたねはつるまでもなほかたりつゞけ、冬の寒さを忘れはてけるも、へだてなき友のたまものなりかし。

網代木　　永田たれ子

よをこめてあしろもる身やいかならん
　ひを見るたにもさむけきものを

鷹　　仝

をは振に散りもやすると見るはかり
　ゆきにまかへるましらふのたか

門司港に船かかりける夜　　吉弘新子

影さへもすすりのうみになかれけり
　ふてたてやまのあきのよのつき

月前時雨

うき雲のただよふおくやつきならん　たゝまたゝまにかけぞしくるゝ　仝

うきくものたゝまをもれて照る月の　しつくさみしはしくれなりけり　仝

木野小學校四年生士族黒田通天女が身まかりける時葬式につらなりて

裁縫敎授　佐々小琴子

縫糸のながきわかれをせんさては　にはのなでしこをしへぬものを

越路に今朝初雪のふりければ

山田璋子

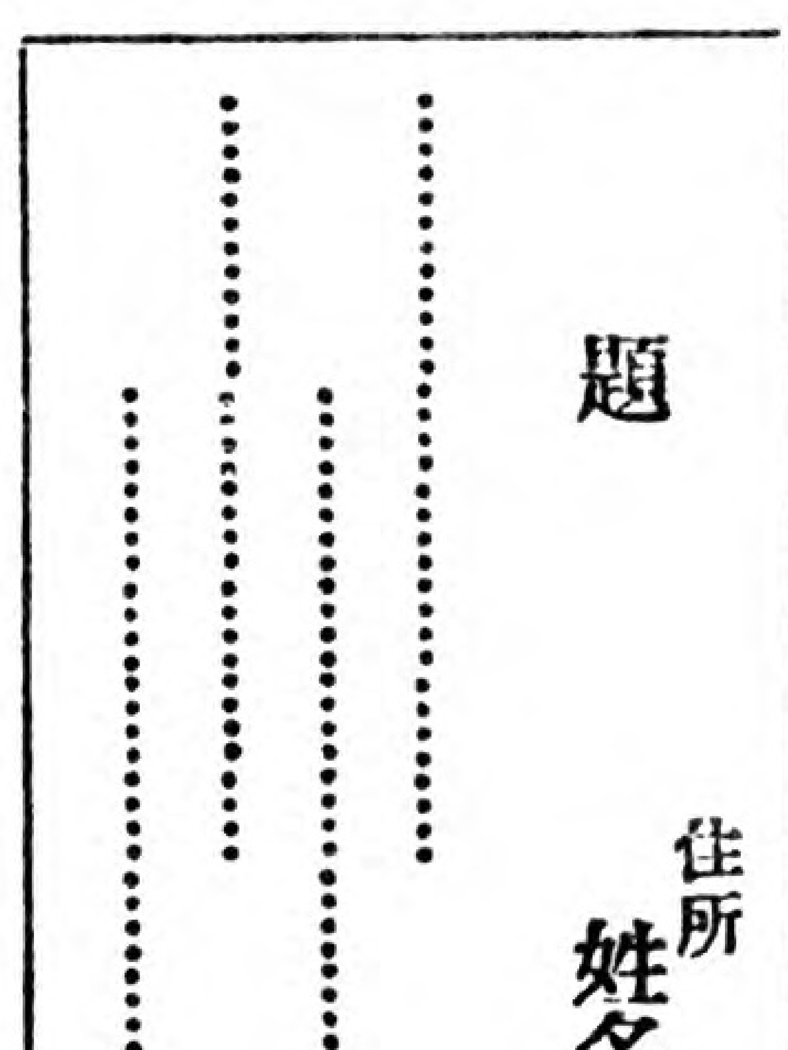
松の葉のさきはのいろもわかぬまで　つもりにけりなけさのしらゆき

◎兼題賞與

來る明治三十一年一月五日兼題の三才には、歌文共、天に**女子敎育要言**一部。地に**雅文消息集**一部。人に**修身百首**一部を、各進呈すべし。

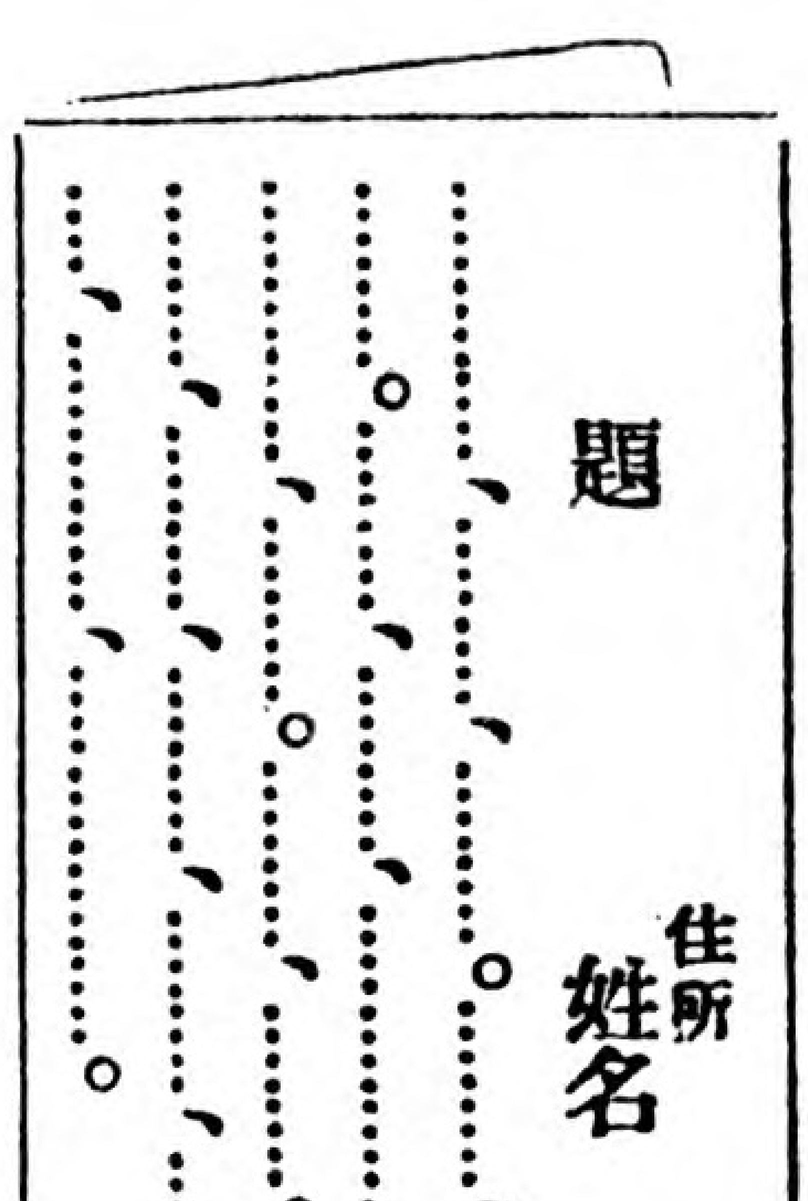
●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式



用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式



用紙は半紙二つ折の事。字體は詳明に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離て認むべし。書式に違ひたるは すべて沒書とす。

大日本女學會

會員募集廣告

總裁小松宮妃殿下副總裁鍋島侯爵夫人

●本會賛議員は有栖川宮大妃殿下華頂宮□殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子敎育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すへき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居なからに通信敎授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇到を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す●本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一回の講修を終りたれも今や新に學科を増設し紙面を刷新し更に第二回講修期を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし●本會講義錄は女學講義と稱し畏くも 皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す●會費一箇月參拾錢束修參拾錢●會則希望者は郵劵貳錢を添て申込あれ

學科及び講師 ●修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て演說せられたる者に係る(禮法)佐方女子高等師範學校敎諭●國語(國文)關根學習院敎授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長●漢文、土屋華族女學校敎授●歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士●地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士●理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定●家事(家庭敎育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校敎諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士●割烹、御園華族女學校敎員●小兒心理學、下田文學士●裁縫、渡邊東京裁縫學校長●習字、坂華族女學校敎授●音樂、未定●手藝(活花點茶)田邊東京女學館講師

附錄 家●史談、下田華族女學校學監●小說、逍遙學海紅葉三大家●れ伽譚、漣山人●詞藻●質問應答雜報雜錄

第一卷既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地 大日本女學會

華族女學校學監 正五位下田歌子先生著述

家庭文庫 第貳編

普通禮式

十一月下旬發行

全壹册和裝 大和綴頗堅牢美本

正價卅五錢 郵税六錢

著者の題言に曰く「世の文明に進むに從ひて禮式作法を知るの忽にす可らざるは云ふも更なれど本邦の禮法やゝもすれば古式舊格に泥みて現今時の革新に遇ひ事物の複雜に趣くに從ひて能く之を變遷し其實踐に適切ならしむるもの少なきが故に其之れを知るの必要を口にしつゝも其孰れによりて學ぶへきかを思ひ惑ふもの少なからざるなり是故に此篇には勉めて其東西上下を通じて目下行はるゝ所のものを應用し尚其注意の要點を指し示して云々するは斯く〳〵の理由これ〳〵の作用は何々より來れるものなり等の事をも掲げて其之を習ふ人の爲に幾多の便宜を與へんとするなり」とあり以て本書の眞價を知るに足らん。

第壹編 女子書翰文	第貳編 普通禮式	第參編 詠歌の栞
第四編 料理手引草	第五編 家事心携	第六編 婦女家庭訓

全部六册 和裝隔月一册發行

正價 ●壹册金三十五錢●參册前金壹圓●六册前金壹圓九十錢●郵税壹册六錢つゞ

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

三輪田眞佐子著

女子教育要言　全

十二月十六日發行

●定價金三十錢
●郵税金四錢
●郵劵代用一割増
但一錢切手に限る

三輪田女史の婦人教育に於ける其の薫陶化育の良績は夙に女子教育社會の推重敬服する所今敢て喋々を要せざるなり女史嚢に女子の本分を著はして我國婦女子たるべきもの丶標準を示し女子處世論を著はして女子の身を處する方法を述べらる本社之を世に公にするや忽ち高評を博し從て印刷し從て賣盡し既に七版に及ぶ其の如何に世に重せらる丶かを知るべきなり女史今又本書を著し以て我國の婦女子が如何にして其本分を盡すに足る資格を養ひ如何にして其身を處するに足る技倆を練らんかを述べらる蓋し世間女子教育の論尠からずと雖多く教育者の注意を促すを目的とするものなれは此等は廣く讀者を益せざるを憾とす本書は教育の方法に止まらず婦女各自の訓戒となるべき義理を撰び叮嚀親切に說きさ論されたるを以て獨り教育者のみならず廣く女學生は更なり兒を懷く婦人と雖針をもてる少女と雖苟も我國の婦女子たるものは必之を讀まざるべからざる良書なり今左に其目次を掲ぐ其の詳細は本書に就きて之を見るべし

女子教育要言目録

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　國光社





社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金(三ヶ月分)	五十五錢	
十二冊前金(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年十二月十九日印刷
同年十二月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衞

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮雄

發行所 (電話番號本局八八) 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

金製指環

● 川端玉章先生考案並畫

● 加納夏雄先生考案並畫



● 十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十五圓マデ

● 十八金目方三匁付平象嵌入價二十三圓ヨリ二十九圓マデ

● 二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓マデ

● 二十二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓マデ

指輪は其人の正札なりとは千載不勉の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れば、其人の性質品格おのづから現はるゝ事、諸君御承知の通なり、なまじひ其品位を劣す様なる指輪は、寧ろ指さゞるが愈ぞかし、強に金の量が重くて、寶石が輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上ろ[illegible]に非ず、品格は金にて買ると思ふは誤なり、假令その價は高からずとも、其意匠や彫刻が優美なれば、何と無く氣高く見えて、其人までが奥ゆかしく成ること、是ぞ即ち美術の徳なる本堂深く此に意を注ぎ、金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して、殊に高尚を旨と致すなれば、優美なるは勿論、瀟洒風流の意氣自然に溢れて、是を指せば其品格を進め、其人の性情さこそと見ゆるきつと保證いたすなり、願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる所を知し召せ、謹で白す

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類
貴金屬美術品 商（電話番號本局三百三十三）

天賞堂

妙技一等賞牌



東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北二入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番地

天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地

天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方

天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方

天賞堂小樽臨時出張所

（明治二十四年八月四日內務省許可）
（明治二十五年三月十二日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）